

盛岡市内遺跡群

— 平成 28 年度発掘調査報告書 —

西鹿渡遺跡 第 30 次
台太郎遺跡 第 87・88 次
西黒石野遺跡 第 14 次

2019. 9

盛岡市教育委員会

盛岡市内遺跡群

— 平成 28 年度発掘調査報告書 —

西鹿渡遺跡 第 30 次
台太郎遺跡 第 87・88 次
西黒石野遺跡 第 14 次

2019. 9

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市は、北上平野を縦断する北上川と、その東西に位置する奥羽山脈と北上山地から流れ出る雫石川・中津川との合流点に位置し、雄大な岩手山や姫神山を望む約 30 万人の人口を抱える岩手県の県都です。北東北の拠点都市として緑豊かな環境と高度都市機能の調和したまちづくりを目指しています。

市内には旧石器時代から江戸時代まで、およそ 780 個所の遺跡が存在します。その中には、国・県・市指定の史跡として保存・活用が図られているものもありますが、各種開発等によって姿を変え、消滅していく遺跡があることも事実であります。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国の補助を受け市内各地の個人住宅建築に伴う調査を継続的に実施しており、当市の歴史を紐解くうえで、大変貴重な成果をあげております。

本書は、平成 28 年度に実施した市内遺跡群の発掘調査報告書であります。市民の皆様の地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大なる御指導や御助言を賜りました文化庁文化財部記念物課ならびに岩手県教育委員会生涯学習文化財課及び、発掘調査に御理解と御協力を頂いた地権者各位ならびに地元関係者の皆様に厚く御礼申しあげます。

令和元年 9 月

盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一

例 言

- 1 本書は、平成 28 年度国庫補助事業「盛岡市内遺跡群」の発掘調査報告書である。
- 2 本書は遺構及び遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集・執筆は鈴木俊輝、今松佑太が担当し、室野秀文、菊地幸裕、津嶋知弘、神原雄一郎、今野公顕、花井正香、佐々木亮二、及川葉里、上柿南、佐々木あゆみが協力した。
- 3 遺構の平面位置は、過去の調査との整合性のため、日本測地系を用い、平面直角座標系 X 系を座標変換した調査座標で表示した。なお、方位は座標北を表している。

西鹿渡遺跡 調査座標原点 X - 37,400.000 m Y + 28,600.000 m = R X ± 0.000 R Y ± 0.000

台太郎遺跡 調査座標原点 X - 35,500.000 m Y + 26,500.000 m = R X ± 0.000 R Y ± 0.000

西黒石野遺跡 調査座標原点 X - 29,000.000 m Y + 26,000.000 m = R X ± 0.000 R Y ± 0.000

- 4 高さは標高値をそのまま使用している。
- 5 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（2013 小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業(株)発行）を参考にした。
- 6 遺構の名称及び記号は次のとおりである。また「竪穴建物跡」の名称については、『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』（2010 文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編集）に倣っている。

遺 構	記号	遺 構	記号
竪穴建物跡	R A	竪 穴 跡	R E
土 坑	R D	溝 跡	R G

- 7 台太郎遺跡の遺構番号は、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、「県埋文センター」という。）調査遺構番号との整合を図り、以下のとおりとした。

本調査精査遺構：3 桁または 4 桁の遺跡内連続番号

（基本的に県埋文センター調査遺構番号に連続、一部欠番あり）

- 8 使用した地図は国土交通省国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 「盛岡」「矢巾」の地形図である。
- 9 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。
- 10 本調査の一部については速報展等で発表しているものがあるが、本書の記載内容をもって訂正する。

11 調査体制 -平成28年度～令和元年度-

[調査主体] 盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一
 教育部長 豊岡 勝敏
 教育次長 中野 玲子 (～ H28 年度)
 大倉 慎澄 (H29 ～ H30 年度)
 大澤 浩 (R1 年度～)

[調査総括] 歴史文化課 遺跡の学び館

課長兼館長 杉本 浩 (～ H30 年度)
 福田 淳 (R1 年度～)
 館長補佐 北田 牧子 (～ H28 年度)
 多田 秀明 (H29 ～ H30 年度)
 三浦 志麻 (R1 年度～)

[調査]

文化財副主幹 室野 秀文
 文化財副主幹 菊地 幸裕
 文化財主査 津嶋 知弘
 文化財主査 神原雄一郎 (～ H29 年度) ※調査 (西黒石野遺跡)
 文化財主査 今野 公顕 (H30 年度～)
 文化財主査 花井 正香 ※調査 (西黒石野遺跡)
 文化財主査 佐々木亮二 ※調査 (西鹿渡遺跡)
 文化財主事 鈴木 俊輝 ※調査 (西鹿渡遺跡, 台太郎遺跡)
 文化財調査員 今松 佑太 ※調査 (西鹿渡遺跡, 台太郎遺跡, 西黒石野遺跡)
 文化財調査員 及川 栞里 (～ H29 年度)
 文化財調査員 上柿 南 (H30 年度)
 文化財調査員 佐々木あゆみ (R1 年度～)

[管理・学芸]

主事 佐藤 美沙 (～ H28 年度)
 主任 川村 忠 (H29 ～ H30 年度)
 主任 菊池 好文 (R1 年度～)
 文化財調査員 日野杉順子 (～ H29 年度)
 文化財調査員 新井 順 (H30 年度)
 文化財調査員 金 俊教 (R1 年度～)
 学芸調査員 樋下 理沙 (～ H30 年度)
 学芸調査員 坂本 志乃 (～ H29 年度)
 学芸調査員 千葉 貴子 (H30 年度～)

[発掘調査・室内整理作業]

伊藤敬子, 及川亜矢子, 及川京子, 長内理恵, 小松愛子, 佐々木富士子, 佐藤和子, 佐藤公一,
 谷藤貴子, 千葉留里子, 袴田英治, 樋口泰子, 細田幸美

[地権者・調査協力]

工藤弘治, 木村大吉, 竹澤龍司, 川村金一, 岩手県教育委員会, 公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

[発掘調査に係る業務委託]

株式会社加速器分析研究所 (年代測定・樹種同定)

(五十音順, 敬称略)

《遺物の表現について》

(1) 土器

- a 土器の区分は, 縄文土器・弥生土器・土師器に大別した。
- b 土器の実測図・拓本は 1/3 スケールとした。
- c 挿図の土器配列については, 器種・器形・出土層位・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
- d 土師器の黒色処理されたものは, 網目 (スクリーントーン) で表現した。

(2) 石器

- a 剥片石器の縮小率は 2/3, 礫石器は 1/2 及び 1/4 とした。
- b 石器の展開順序は, 基本的に左側に表面 (背面), 中央に右側面, 右側に裏面 (腹面) を配列し, 必要に応じて縦断面・横断面を付け加えた。

(3) 土製品

- a いずれも縮小率を 1/2 とした。

(4) 挿図中の記号・番号は遺物の出土位置及び出土層位を表している。

(例) R A 369 C層 → R A 369 竪穴建物跡内埋土C層より出土

(例) G 9 - D 21 IV層

↓ ↓ ↓
※ 1 ※ 2 ※ 3

- ※ 1 調査座標原点 $R X \pm 0$ $R Y \pm 0$ を起点として, $X \cdot Y$ 両軸を 50 m ごとに区切る大グリッドを設定し, X 軸線上を西から東へ $A \cdot B \cdot C \cdots W \cdot X \cdot Y$ (東から西への場合は $-A \cdot -B \cdot -C \cdots -W \cdot -X \cdot -Y$), Y 軸線上を北から南へ $1 \cdot 2 \cdot 3 \cdots 23 \cdot 24 \cdot 25$ (南から北への場合は $-1 \cdot -2 \cdot -3 \cdots -23 \cdot -24 \cdot -25$) と付し, 北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組み合わせを, 大グリッドと呼称した。
- ※ 2 大グリッドを 2 m ごとに細分割し, 小グリッドを設定し大グリッドの呼称を再び用いた。よって大グリッド-小グリッドという組み合わせで, 遺物の平面出土地点を 2 m ごとに表示した。
- ※ 3 遺物の出土層位を表している。

《遺構の表現について》

遺構の挿図中, 説明する当該遺構については, 実線で表現した。

目 次

序 言	
例 言	
目 次	
表 目 次	
挿 図 目 次	
写真図版目次	

I 平成28年度発掘調査の概要	1
II 西鹿渡遺跡（第30次調査）	5
III 台太郎遺跡（第87・88次調査）	17
IV 西黒石野遺跡（第14次調査）	31

写 真 図 版

附 章

台太郎遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	47
台太郎遺跡から出土した炭化材の樹種	50
報告書抄録	

表 目 次

第1表 平成28年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第2表 西鹿渡遺跡調査一覧	6
第3表 台太郎遺跡調査一覧（1）	19
第4表 台太郎遺跡調査一覧（2）	20
第5表 西黒石野遺跡調査一覧	32

挿 図 目 次

第 1 図	地形分類と周辺の遺跡分布	3
第 2 図	西鹿渡遺跡の位置 (1:50,000)	5
第 3 図	西鹿渡遺跡全体図	7
第 4 図	西鹿渡遺跡第 30 次調査全体図	8
第 5 図	R A 042 竪穴建物跡	10
第 6 図	R A 042 竪穴建物跡土層断面図	11
第 7 図	R A 042 竪穴建物跡出土遺物 (1)	13
第 8 図	R A 042 竪穴建物跡出土遺物 (2)	14
第 9 図	R A 042 竪穴建物跡出土遺物 (3)	15
第 10 図	台太郎遺跡の位置 (1:50,000)	17
第 11 図	台太郎遺跡全体図	21・22
第 12 図	台太郎遺跡第 87・88 次調査全体図, R G 280 溝跡	23
第 13 図	R A 702 竪穴建物跡	25
第 14 図	R E 097 竪穴跡, R D 2213 土坑	27
第 15 図	R A 702 竪穴建物跡・R E 097 竪穴跡出土遺物	28
第 16 図	西黒石野遺跡の位置 (1:50,000)	31
第 17 図	西黒石野遺跡全体図	33
第 18 図	西黒石野遺跡第 14 次調査全体図	34
第 19 図	遺物包含層出土遺物	36

写 真 図 版

第 1 図版	西鹿渡遺跡第 30 次調査区全景, R A 042 竪穴建物跡全景, R A 042 竪穴建物跡遺物出土状況, R A 042 竪穴建物跡出土遺物 (1), R A 042 竪穴建物跡出土遺物 (2)
第 2 図版	台太郎遺跡第 87・88 次調査区全景, R A 702 竪穴建物跡全景, R E 097 竪穴跡全景, R G 280 溝跡全景, 台太郎遺跡第 87・88 次調査出土遺物
第 3 図版	西黒石野遺跡第 14 次調査区全景, 遺物包含層断面, 遺物出土状況, 遺物包含層出土遺物 (1), 遺物包含層出土遺物 (2)

I 平成 28 年度発掘調査の概要

1 平成 28 年度事業の概要

発掘調査 平成 28 年度は、発掘調査・試掘調査をあわせて 24 件実施した（学術調査・現状変更除く）。このうち国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は本調査 4 件である（第 1 表）。本調査は西鹿渡遺跡第 30 次調査、台太郎遺跡第 87・88 次調査、西黒石野遺跡第 14 次調査である。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
西鹿渡遺跡 (第 30 次)	盛岡市三本柳 2 地割 35-17	16.04.27 ~ 05.24	73m ²	個人住宅建築
台太郎遺跡 (第 87 次)	盛岡市向中野二丁目 37-68	16.05.16 ~ 06.03	61m ²	個人住宅建築
台太郎遺跡 (第 88 次)	盛岡市向中野二丁目 37-68	16.05.16 ~ 06.03	61m ²	個人住宅建築
西黒石野遺跡 (第 14 次)	盛岡市黒石野二丁目 35-32	16.12.15	36m ²	個人住宅建築

第 1 表 平成 28 年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

2 盛岡の地形・地質

盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山（2,038 m）を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地形・地質に大きく影響を及ぼしている。

北上山地 北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、古生代や中生代の堆積岩及び花崗岩からなる。これまで、北上山地の地質を南北に区分する境界断層帯は「早池峰構造体」と呼ばれていたが、近年の研究によって地帯区分の整理が進み、現在、北上山地の地質はその構造史より、北部北上帯、南部北上帯とその間に分布する根田茂帯の大きく三つに分けられる。盛岡市東部は、根田茂帯の西縁にあたる。これらの山地縁辺には、中津川・築川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。盛岡市北東部を流れる中津川は、その最大支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川と合流する。築川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる岩神山（1,103 m）の西斜面より流れ、最大支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道（宮古街道）に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。

奥羽山脈 奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれる。雫石川は奥羽山脈より東流し、雫石盆地を形成する。その流れは烏泊山と箱ヶ森に挟まれた盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、その狭窄部を抜けて北上平野に流れ込む。雫石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なり、雫石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩屑なだれ堆積物を基盤とした火山灰砂台地（滝沢台地）が広がっている。その範囲は盛岡市北部から滝沢市北部まで広範囲に及んでいる。雫石川南岸には、雫石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された沖積段丘が広がっている。

雫石川は、これまでに何度も流路を変えており、雫石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。この沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上層に水成シルト、さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりではなく、微高地上にも堆積している。これは沖積段丘が、河道の定まらない雫石川の下刻が周辺山地からもたらされる砂礫やシルトによって形成され、何度も堆積が繰り返されたことによるものである。雫石川の旧河道は幾筋も確認されており、大きなものは4条、その他にも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。現在は宅地造成や圃場整備が進み、旧地形を留めているところは少ないが、航空写真などを見ると旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できる。

3 歴史的環境

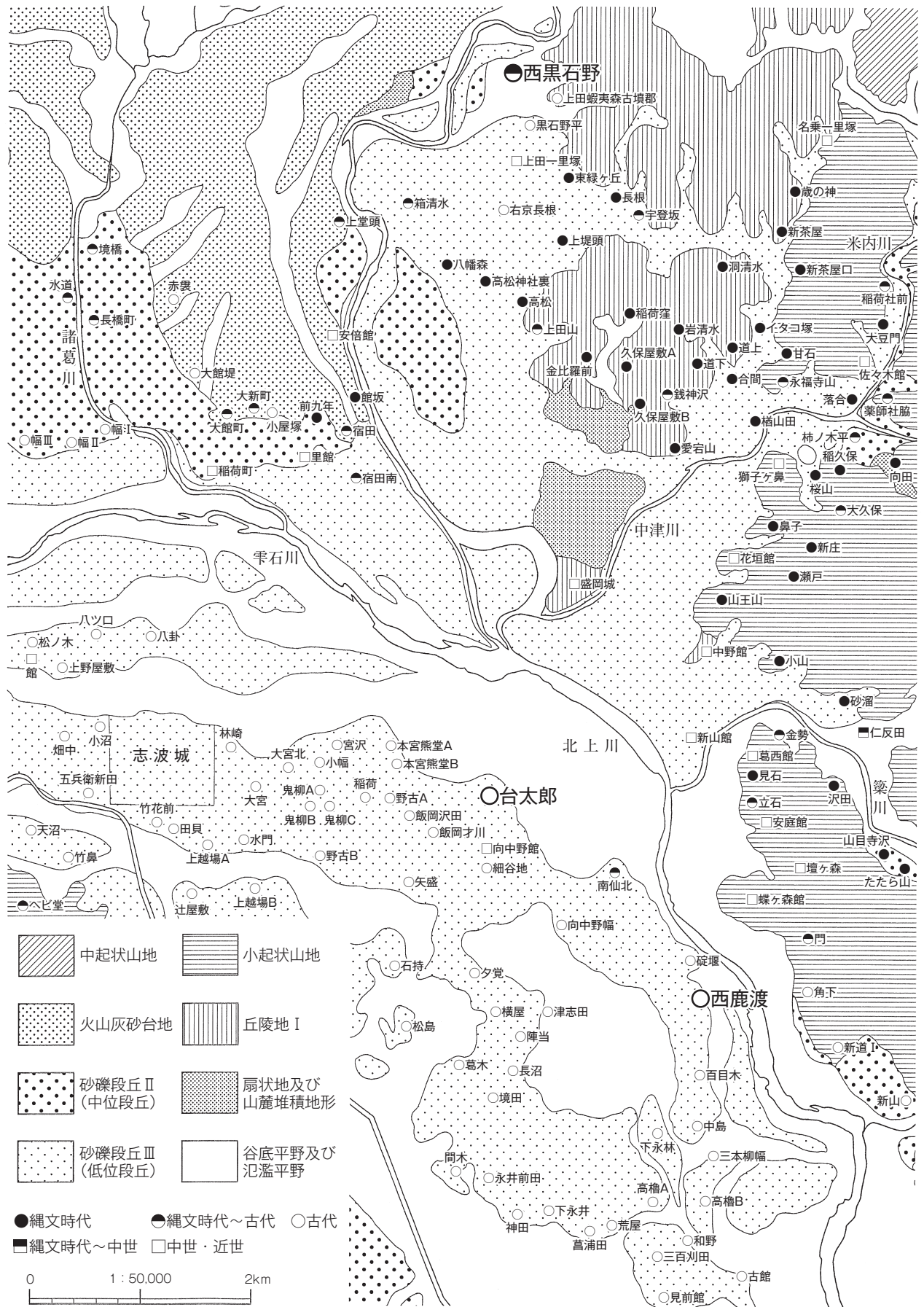
旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、市街地から北東へ約20kmの藪川字外山に小石川遺跡が所在する。山間部の小河川に臨む台地上にあり、後期旧石器時代の遺跡で木葉形尖頭器や石核、剥片、台石などが出土している。また、対岸には細石刃や石核の採集された大橋遺跡がある。

縄文時代 滝沢台地上に立地する大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺跡からは、草創期の「爪形文土器」が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、前述の3遺跡以外にも大館堤遺跡・館坂遺跡・前九年遺跡・宿田遺跡などで早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期は日本列島全体で温暖化が進み、遺跡数が増加し大規模な集落が出現する時期である。しかし、盛岡周辺に限っては北上山地内に散見するのみで遺跡の数は少なく、上八木田I遺跡・畑遺跡などで確認されている程度である。これは、約6,000年前に起こった岩手山の山体崩壊による自然災害の影響が関連していると考えられている。

縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加し、雫石川南岸の沖積平野を除く、広い地域に分布する。繫V遺跡・大館町遺跡・柿ノ木平遺跡・川目C遺跡・湯沢遺跡など、主要河川の流域や山麓の扇状地状の地形などに大規模な拠点集落が営まれるようになる。

後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿ノ木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落、萩内遺跡や湯壺遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、宇登遺跡・上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認されている。



第1図 地形分類と周辺の遺跡分布

弥生～古墳 弥生時代の遺跡数は少ないが、繫VI遺跡では前期の竪穴建物跡と中期の再埋葬が確認されており、浅岸地区の向田遺跡、堰根遺跡では、前期（砂沢式期）や終末期（赤穴式期）の土器を伴う竪穴建物跡が確認されている。

古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で北海道系の形態をもつ土坑墓群が確認されている。永福寺山遺跡では後北 C2-D 式土器が共伴し、薬師社脇遺跡では、古式土師器が埋納されていた。

古 代 古墳時代終末から奈良時代にかけて、雫石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7世紀前半の遺構・遺物は少ないが、竹鼻遺跡で確認されている。7世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、8世紀代には太田蝦夷森古墳群、高館古墳群などの終末期古墳が築造され、野古 A 遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、803年に陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であると同時に、北方地域との結節点でもあったが、雫石川の水害を理由に、813年～814年には徳丹城（矢巾町）へ規模を縮小して移転している。その後9世紀中ごろより、陸奥北部の経営体制は鎮守府胆沢城に集約されていく。志波城東側の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幅遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在している。同様の建物跡は堰根遺跡でも確認されており、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子が見えてくる。この時期の集落は沖積面だけではなく、上猪去遺跡・猪去館遺跡・新道Ⅱ遺跡など、山麓台地や丘陵の斜面にも拡がりをみせる。

10世紀後半から12世紀までの遺跡は少ないが、大新町遺跡や小屋塚遺跡では、11世紀前半頃の掘立柱建物や竪穴跡と土器が出土しており、境橋遺跡や宿田遺跡、上堂頭遺跡でも11世紀前半の遺構遺物が確認されている。また、赤曇遺跡では土器生産工房跡が確認され、数千点に及ぶ11世紀中葉の土器が出土している。これらは儀礼行為に供されたものとみられ、厨川柵が近くに存在することを裏付けるような調査成果が上がっている。12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は、落合遺跡・堰根遺跡・稲荷町遺跡などで確認されている。また、奥州藤原氏の影響下にあったとされる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経塚が築かれるようになり、内村遺跡では経塚に埋納したとみられる常滑窯産の大甕が出土しているほか、湯壺経塚からは常滑の三筋文壺、一本松経塚からは渥美窯産の壺が発見されている。大宮遺跡では大溝から12～13世紀のかわらけが出土している。

中 世 鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、斯波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のもと考えられている。これらの城館跡は丘陵や山頂など見晴らしい場所だけでなく、平野部の微高地などにも多数築かれている。現在の盛岡城の場所には南部氏の家臣であった福士氏が築いた北館（慶善館）、南館（淡路館）からなる不來方城が存在した。

近 世 現在の城下の町並みの形成は、その南部氏の盛岡城築城から始まる。九戸合戦終結後の天正19年（1591）、南部信直は帰還する豊臣軍の軍監浅野長政から不來方城において、この不來方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている（『祐清私記』）。その後、慶長2年（1597）より盛岡城の築城は始まり、寛永10年（1633）に一応の完成をみる。

Ⅱ 西鹿渡遺跡（第30次調査）

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

遺跡の位置 西鹿渡遺跡は、JR盛岡駅より南東に約4.5kmの三本柳2地割地内に所在する（第2図）。

遺跡範囲は南北約600m、東西約350mと推定され、かつては畑や果樹園などが多く見られたが、現在は宅地化が著しい場所である。

地形・地質 本遺跡の東を南流する北上川と本遺跡の北東約3.5km地点で合流する雫石川は、これまでに幾度となく流路を変えており、北上川西岸と雫石川南岸には細かい旧河道が網目状に確認されている。本遺跡はその旧河道によって画された低位沖積段丘上に立地している（第1図）。

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡 本遺跡の北には碓堰遺跡、南には百目木遺跡・下永林遺跡・三本柳幅遺跡・高槽A遺跡などが立地している。百目木遺跡では、大型商業施設建設に伴い旧都南村教育委員会が行った調査で、8世紀後半及び9世紀後半を中心とした竪穴建物跡が80棟あまり確認され、墨書土器や鉄製農耕具、初痕のついた土器などが出土している。下永林遺跡からは昭和10年に蕨手刀1振（市指定文化財）が耕作中に出土しており、古墳群の存在がうかがわれていたが、区画整理事業に伴う平成28年度から令和元年度の調査で、8世紀から9世紀に帰属する円形周溝十数基が確認されており、周辺集落の有力者を埋葬した墓域だったのではないかと考えられている。また、高槽A遺跡では8世紀後半から末頃を主体とした竪穴建物跡が30棟あまり確認され、土製紡錘車が多数出土している。



第2図 西鹿渡遺跡の位置（1：50,000）

2 調査内容

(1) これまでの調査

本遺跡は、昭和55年の旧都南村教育委員会が実施した宅地造成に伴う調査（第1次調査）以降、宅地造成、個人住宅の建築、共同住宅の建築などに伴い、令和元年度まで37回にわたる調査が行われている。耕作等により大きく攪乱され、遺構や遺物が確認できない地点もあるが、奈良・平安時代の竪穴建物跡や溝跡、土坑およびそれ以降の溝跡や土坑も確認されている。遺物は8世紀半ばから9世紀後半と考えられる奈良・平安時代の須恵器、あかやき土器、土師器、鉄製品、近世以降の陶磁器片などが出土している。

回数	所在地	調査原因	面積(㎡)	期間	検出遺構・遺物
1	三本柳2地割地内	宅地造成	1,000	1980.07.20-08.14	奈良・平安竪穴建物跡2棟, 時期不詳溝跡1
2 試掘	三本柳2地割 28-1, 2	宅地造成	652	1993.08.18-08.19	平安竪穴建物跡12, 土坑4, 古代以降溝跡1
3 試掘	三本柳2地割地内	宅地造成	100	1993.06.16	遺構・遺物なし
4 試掘	三本柳2地割地内	宅地造成	172	1993.12.20	遺構・遺物なし
5	三本柳2地割 36-2	防火水槽建設	62	1994.09.01-09.03	奈良竪穴建物跡1, 土坑2
6	三本柳2地割 22-7	個人住宅建築	291	1995.07.04-07.11	奈良竪穴建物跡1, 土坑1, 時期不詳溝跡1
7	三本柳2地割 16-6	個人住宅建築	393	1995.08.18-09.05	縄文土坑1, 奈良竪穴建物跡2, 土坑1
8 試掘	三本柳2地割 39-1	共同住宅建築	54	1997.11.11	遺構・遺物なし
9 試掘	三本柳2地割 47-5	共同住宅建築	268	1997.11.28	遺構・遺物なし
10 試掘	三本柳2地割 47-6	共同住宅建築	269	1998.02.12	遺構・遺物なし
11 試掘	三本柳2地割地内	共同住宅建築	196	1998.08.17	平安竪穴建物跡2
12	三本柳2地割地内	宅地造成	970	2002.10.01-12.02	奈良竪穴建物跡5, 土坑3, 近代溝跡1, 土坑1
13 試掘	三本柳2地割 25-1	共同住宅建築	820	2002.07.23-07.25	奈良竪穴建物跡5, 時期不詳溝跡3
14 試掘	三本柳2地割地内	宅地造成	555	2002.07.29-07.31	奈良竪穴建物跡13, 時期不詳溝跡1
15 試掘	三本柳2地割地内	宅地造成・共同住宅建築	501	2002.11.25-11.28	平安土坑2, 溝跡4
16 試掘	三本柳2地割 39-43	共同住宅建築に伴う擁壁設置	68	2003.04.16	遺構・遺物なし
17 試掘	三本柳2地割 42-1	共同住宅建築	146	2003.04.16	遺構・遺物なし
18	三本柳2地割 36-1～4	宅地造成	2,226	2003.06.02-08.02	竪穴建物跡(奈良13, 平安4), 古代土坑17, 古代以降溝跡5, 時期不詳溝跡3
19	三本柳2地割地内	擁壁設置	102	2006.04.13-04.15	時期不詳溝跡2
20	三本柳2地割 49-50～66	下水道・進入路	320	2006.07.31-08.11	奈良竪穴建物跡2, 竪穴跡1
21	三本柳2地割 49-50～66	個人住宅改築	62	2007.04.16-04.27	奈良竪穴建物跡1
22 試掘	三本柳2地割 16-35	個人住宅建築	77	2009.03.18	奈良竪穴建物跡3, 土坑1
23	三本柳2地割 16-35	個人住宅建築	80	2009.06.01-06.12	奈良竪穴跡1, 土坑3
24 試掘	三本柳2地割 39-64	個人住宅建築	43	2009.10.07	遺構・遺物なし
25 試掘	三本柳2地割 32-1	福祉施設建築	282	2009.12.25	奈良竪穴建物跡2
26 試掘	三本柳2地割 33-2, 3	宅地造成	367	2010.04.23	奈良竪穴建物跡4
27 試掘	三本柳2地割 31-1, 2 外	宅地造成	127	2012.06.15	遺構・遺物なし
28 試掘	三本柳2地割 42-1	宅地造成	165	2013.05.09	遺構・遺物なし
29 試掘	三本柳2地割 22-4～6	宅地造成	154	2014.04.30	遺構・遺物なし
30	三本柳2地割 35-17	個人住宅建築	73	2016.04.27-05.24	奈良竪穴建物跡1
31 試掘	三本柳2地割 26-3 外	宅地造成	240	2017.04.11	古代竪穴建物跡1, 古代以降溝跡1
32	三本柳2地割 33-2	宅地造成	1,624	2017.05.15-07.28	奈良竪穴建物跡6, 平安竪穴建物跡2
33 試掘	三本柳2地割 37-2	共同住宅	104	2017.10.11	遺構・遺物なし
34 試掘	三本柳2地割 29-2 外	個人住宅	20	2017.11.21	遺構なし
35	三本柳2地割 28-1	宅地造成	3,032	2018.04.09-07.17	奈良・平安竪穴建物跡5, 竪穴跡1, 古代以降土坑4, 溝跡2
36	三本柳2地割 22-3 外	宅地造成	4,552	2019.04.17-07.11	奈良竪穴建物跡1, 古代以降土坑2, 溝跡1
37	三本柳2地割 37-9	個人住宅	66	2019.05.31-07.02	奈良竪穴建物跡1, 土坑6

第2表 西鹿渡遺跡調査一覧



第3図 西鹿渡遺跡全体図

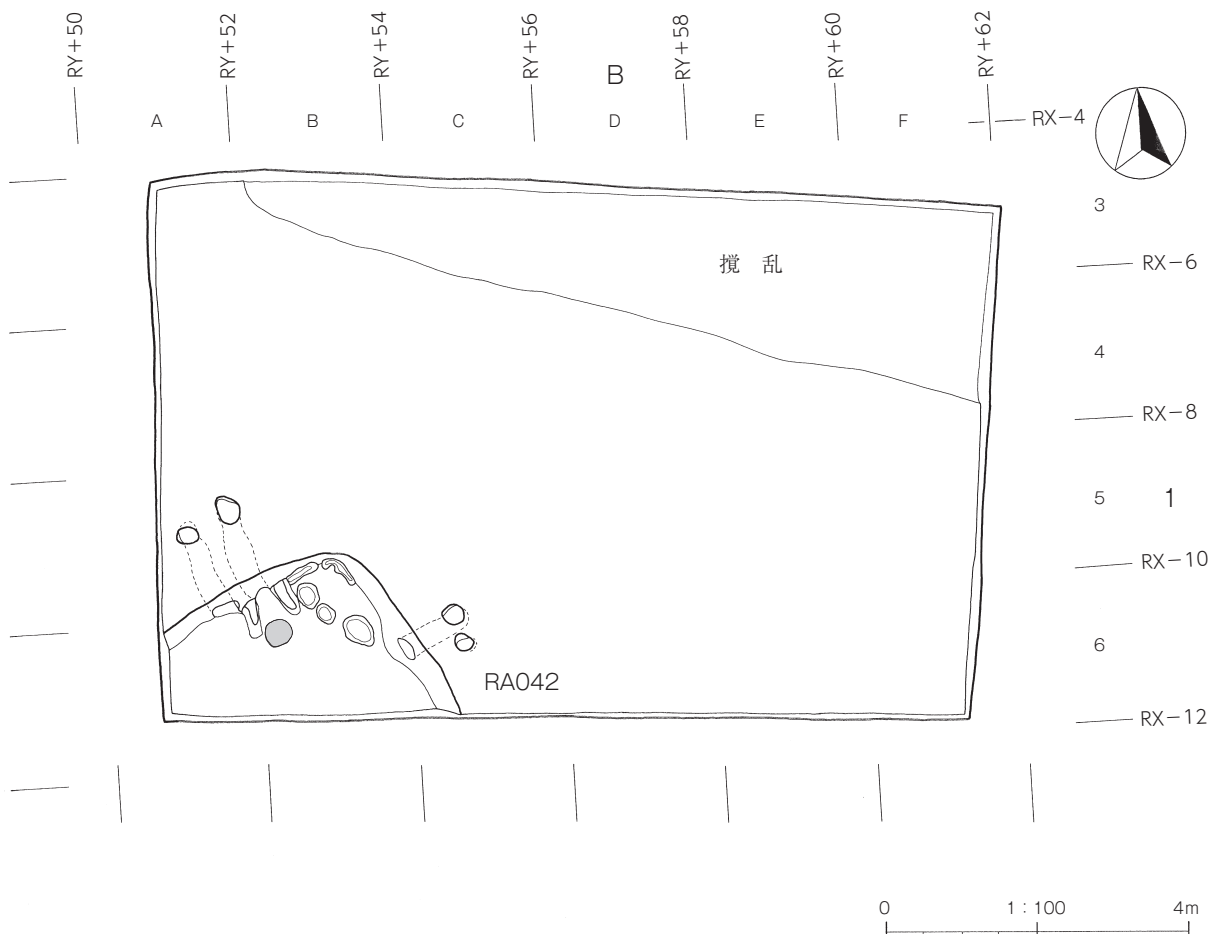
(2) 平成 28 年度の調査

位 置 第 30 次調査区は西鹿渡遺跡の中央部やや南東よりに位置し、平成 14 年度に行われた第 12 次調査区の北側に近接している（第 3 図）。第 12 次調査区とその南側に隣接する第 18 次調査区周辺は、本遺跡の中でも古代の竪穴建物跡が多く確認されている区域である。本調査では、事前の試掘調査で遺構が確認されたため、建物建築予定部分に関してのみ調査を行った。調査区内はほぼ平坦で、検出面の標高値は 115.200 m 前後である。

基本層序 調査区内で確認された基本層序は以下のⅠ～Ⅲ層に大別される。Ⅰ層は表土（耕作土）である。Ⅱ層は暗褐色土層でその上面が遺構検出面である。Ⅲ層は褐色シルト層（地山）で、RA 042 竪穴建物内の壁から底面にかけて確認している。

検出状況 Ⅰ層を除去したⅡ層上面で遺構の検出を行った。検出面までの深さは現地表面から 0.2 m 前後である。調査区及びその北側は畑地であり、調査区内北側は、耕作によるものと思われる攪乱が著しい。

検出遺構 検出された遺構は奈良時代の竪穴建物跡 1 棟（RA 042）、ピット 1 口である（第 4 図）。調査区南西隅に竪穴建物跡の北東隅がかかる形で検出された。

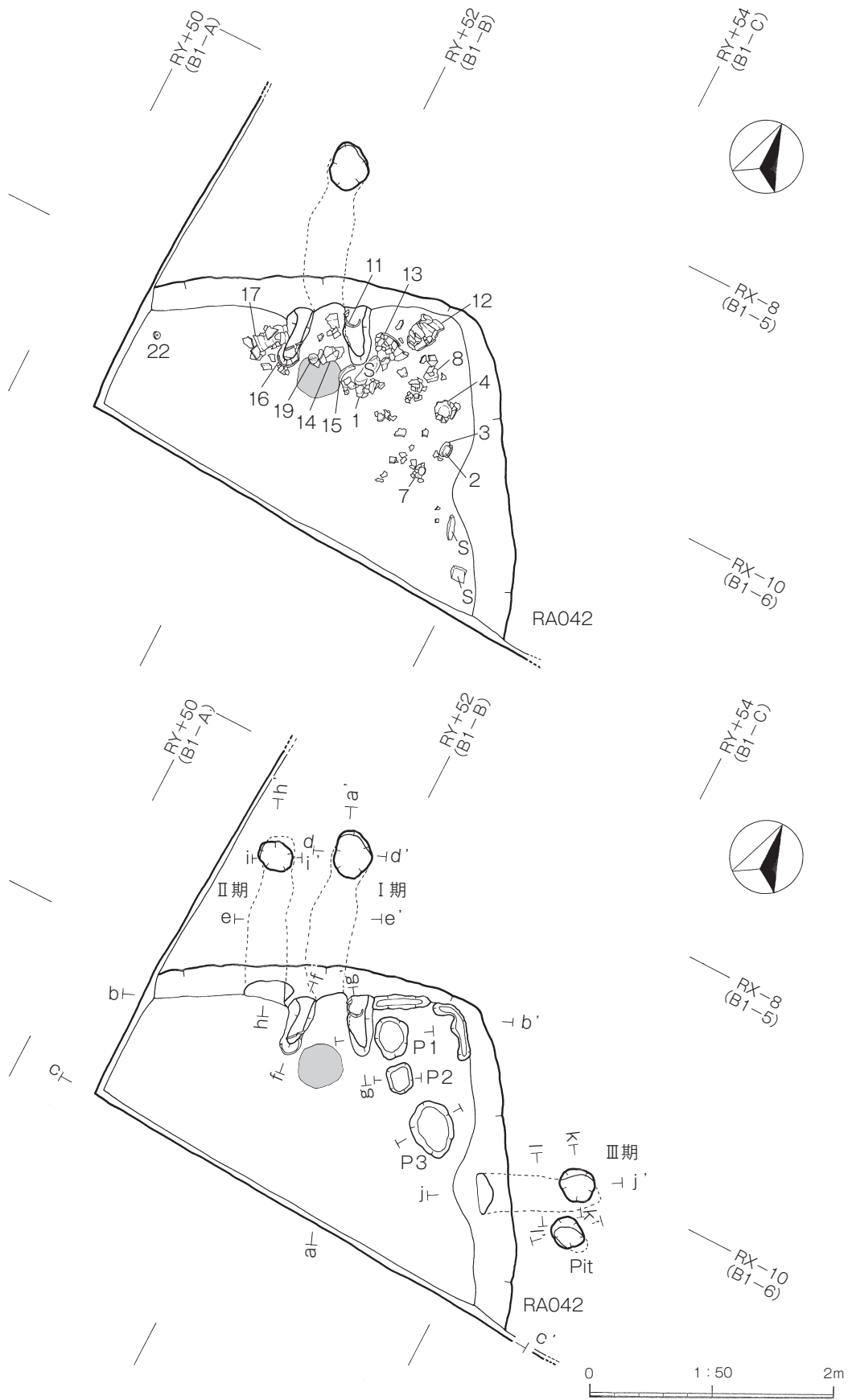


第 4 図 西鹿渡遺跡第 30 次調査全体図

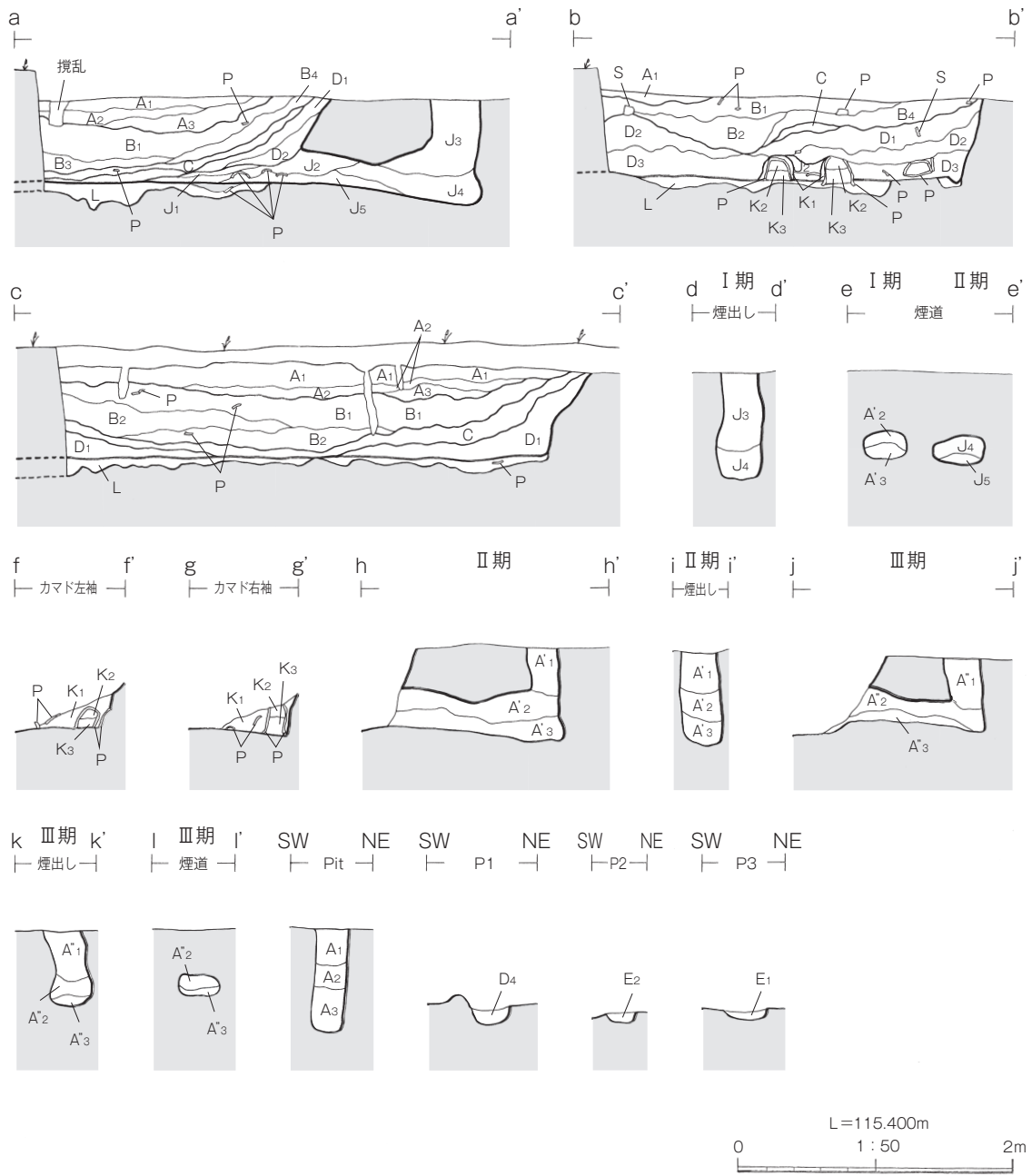
遺構・遺物

RAO42 竪穴建物跡（第5・6図）

位置	調査区南西側	平面形	方形（調査区外）	主軸方向	-		
規模	北西-南東 2.90 m以上（調査区外）		南西-北東 3.32 m以上（調査区外）				
重複関係	なし	検出面	Ⅱ層上面	掘込面	削平	時期	8世紀中葉
埋土	自然堆積でA~D層に大別され、A・D層はさらに3層、B層はさらに4層に細分される。 A ₁ 層-黒色土を主体とし、粉~小粒状の暗褐色土を微量に含む。 A ₂ 層-黒褐色土を主体とし、粉~小粒状の褐色土を微量に含む。 A ₃ 層-黒褐色土を主体とし、粉~中粒状の褐色土を少量含む。 B ₁ 層-粉~塊状の褐色土を含む黒褐色土を主体とし、小粒~塊状の黒色土、にぶい黄橙の粘土粒、小粒~小塊状の焼土粒を微量に含む。 B ₂ 層-黒色土を主体とし、粉~中粒状の褐色土を微量に含む。 B ₃ 層-黒褐色土を主体とし、粉~中粒状の褐色土、粉~小塊状の黒色土を微量に含む。 B ₄ 層-黒褐色土を主体とし、粉~中粒状の黒色土、粉状の褐色土を微量に含む。また、カーボン粒を微量、小粒~小塊状の焼土粒を多量に含む。 C層-黒色土を主体とし、小粒状の褐色土を微量に含む。 D ₁ 層-黒褐色土を主体とし、小粒~中粒状の褐色土を微量に含む、やや締る。 D ₂ 層-黒褐色土と黒色土の混合土を主体とし、粉~塊状の褐色土を少量含む、やや締る。 D ₃ 層-黒褐色土を主体とし、粉~小粒状の黒色土、粉~塊状の暗褐色土を含み、やや締る。						
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.58~0.68 mで、外傾して立ち上がる。北西角の壁際には幅0.08~0.10 m、床面からの深さ0.05~0.06 mの周溝が確認されている。埋土はD ₃ 層である。						
床の状態	ほぼ平坦で構築土（L層）は黄褐色土を主体とし、粒~小塊状の黒褐色土を含み硬く締まる。層厚は0.03~0.20 mである。						
カマド	カマドは3時期（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期）あり、平面形や埋土の状況などから、Ⅱ・Ⅲ期→Ⅰ期の順で造り替えが行われている。Ⅱ・Ⅲ期については基底部分が人為的に壊されており、明確な火床面も確認できない。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期はいずれも剥り貫きのトンネル状で、天井部が残存している。 Ⅰ期のカマドは北西壁北寄りに位置する。煙道の平面形はやや西に屈曲する溝状で、煙出しに向かって徐々に深くなり、煙出し底面で最も深くなる。規模は北西壁から煙出し先端までの長さ1.35 m、幅0.24~0.36 m、検出面からの深さ0.60~0.77 mである。火床面は径0.39 mの不整形円で、熱浸透層は厚さ0.06 mである。土師器の甕を芯材に使用し、暗褐色土を含む褐色シルト（K層）で構築している。規模は東残存部が長さ0.50 m、幅0.23 m、高さ0.31 m。西残存部が長さ0.55 m、幅0.21 m、高さ0.25 mである。カマドは人為的に壊されており、図示していないが、煙道内部に土師器坏（第7図6）が伏せた状態で置かれていた。カマド崩壊土（J ₁ ~ ₅ 層）は5層に細分され、J ₁ 層は黒色土、J _{2,3} 層はやや締まりがある暗褐色土でJ ₂ 層は小粒~中粒状の褐色土、J ₃ 層は小塊~大塊状の黒褐色土を多量に含む。J ₄ 層は粒~小塊の暗褐色土を多く含む黒褐色土で、J ₅ 層は締まりがある褐色土である。焼土粒をJ ₁ 層は微量、J _{2~4} 層は少量含む、J ₅ 層は粒~塊状の焼土を多く含む。						



第5図 RA 042 竪穴建物跡 (上段：遺物出土状況)



第6図 RA 042 竪穴建物跡土層断面

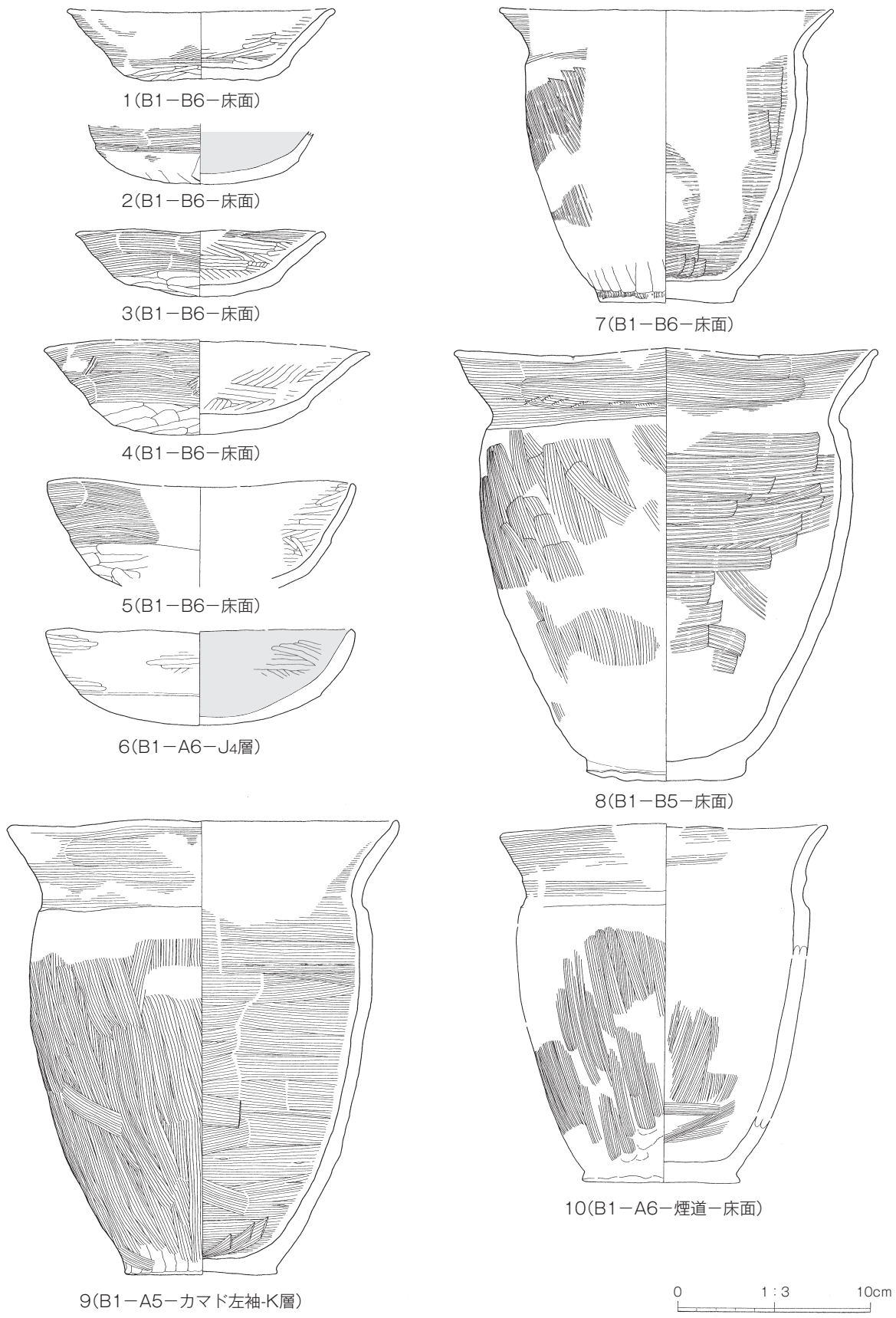
Ⅱ期のカマドは北西壁西寄りのⅠ期カマド西側に隣接しており、Ⅰ期カマドの煙道とⅡ期カマドの煙道との距離は0.20 m前後である。煙道の平面形は不整な溝状で、煙出しに向かって徐々に深くなり、煙出し底面で最も深くなる。規模は北西壁から煙出し先端までの長さ1.29 m、幅0.23～0.34 m、検出面からの深さ0.58～0.69 mである。煙道及び煙出しは人為的に埋め戻されており、埋土(A'₁~₃層)は粒～塊状の褐色土を含む黒褐色土で、やや堅く締りが強い。A'₃層は焼土粒を多く含む。

Ⅲ期のカマドは北東壁に位置している。煙道の平面形は不整な溝状で、煙出しに向かって徐々に深くなり、煙出し底面で最も深くなる。規模は北東壁から煙出し先端までの長さ0.96 m、幅0.26～0.31 m、深さ0.47～0.53 mである。Ⅱ期同様煙道及び煙出しは人為的に埋め戻されており、埋土(A''₁~₃層)は粒～塊状の黄褐色土を多く含む暗褐色土～黒褐色土で、やや堅く締りが強い。A''₁層は焼土粒を微量に含む。

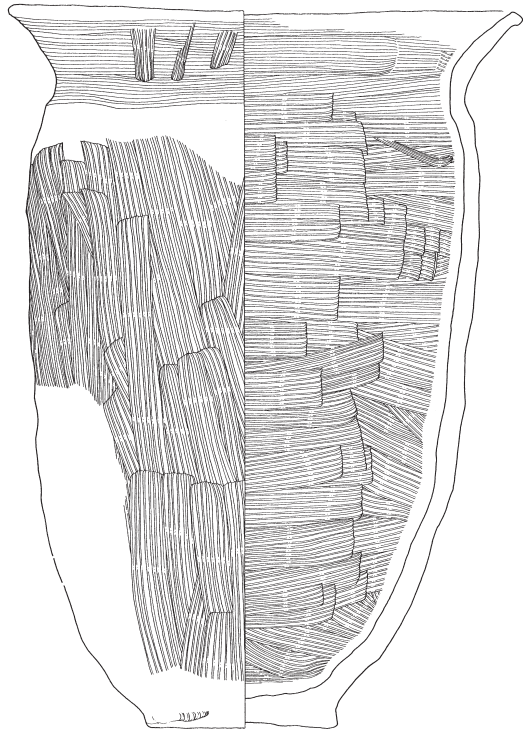
柱 穴 床面に3口検出しているが、いずれも柱痕跡は認められない。各ピットの規模・深さは、P 1 - 径0.26～0.35 m、深さ0.10 m、P 2 - 径0.20～0.25 m、深さ0.07 m、P 3 - 径0.34～0.48 m、深さ0.05 mである。

出土遺物 (第7図～第9図)

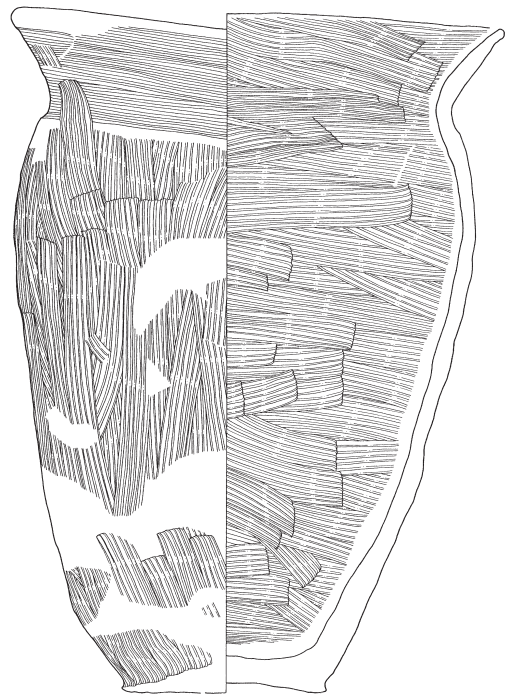
1～6はいずれもロクロ未使用の土師器坏である。1は口縁部から底部までの約1/2が残存する。平底風の丸底で体部に稜を持ち、内面にヘラミガキを施す。2は口縁部を欠損し、丸底で体部に段を持ち、内面に黒色処理を施すが剥離のためミガキの方向は確認できない。3は口縁部の一部を欠損し、丸底で体部に稜を持ち、内面にヘラミガキを施す。4は丸底で体部に稜を持ち、内面にヘラミガキを施す。5は口縁部から底部付近まで約1/4が残存する。丸底と思われ、体部に緩やかな稜を持ち、内面にヘラミガキを施す。6は口縁部の一部を欠損し、丸底で体部に緩やかな段を持ち、内外面にヘラミガキ、内面に黒色処理を施す。7～19は土師器甕である。7・8は器高に対して口径が広いもしくは同じで背が低く、頸部と体部の境に段を持つ器形である。7は口縁部から底部の約1/3が残存し、口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にハケメ調整を施す。8は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヘラナデ、内面にハケメ調整を施す。体部外面に炭化物が付着する。9～18は長胴の甕である。9～12は底部周縁部がやや外に張り出し、頸部と体部の境に段を持つ器形である。9は口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にヘラナデを施す。10は口縁部から体部にかけての外面及び体部内面にヘラナデを施す。9・10ともに体部内外面に炭化物が付着する。11は口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にハケメ調整を施す。12は口縁部外面にヨコナデ、体部外面及び口縁部から体部にかけての内面にハケメ調整を施す。体部内面に炭化物が付着する。13・14は頸部と体部の境に明瞭な段を持つ。13は底部付近を欠損し、口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にハケメ調整を施す。14は口縁部から体部の一部を欠損し、口縁部外面にヨコナデ、体部内外面にヘラナデを施す。15は底部から頸部にかけて緩やかに外傾する器形を呈し、頸部と体部の境に段を持ち、口縁部外面にヨコナデ、体部外面及び口縁部から体部にかけての内面にハケメ調整を施す。14・15ともに体部内面に炭化物が付着する。16～18は口縁部より体部に最大径を持つ器形である。16は底部付近を欠損し、頸部と体部の境に段を持ち、口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にヘラナデを施す。17は底部付近を欠損する。



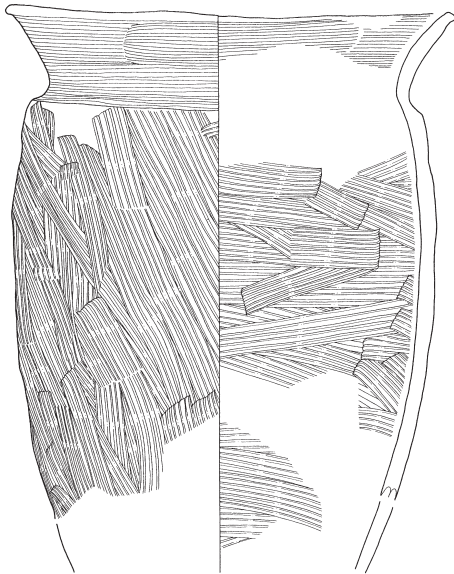
第7図 R A 042 竪穴建物跡出土遺物 (1)



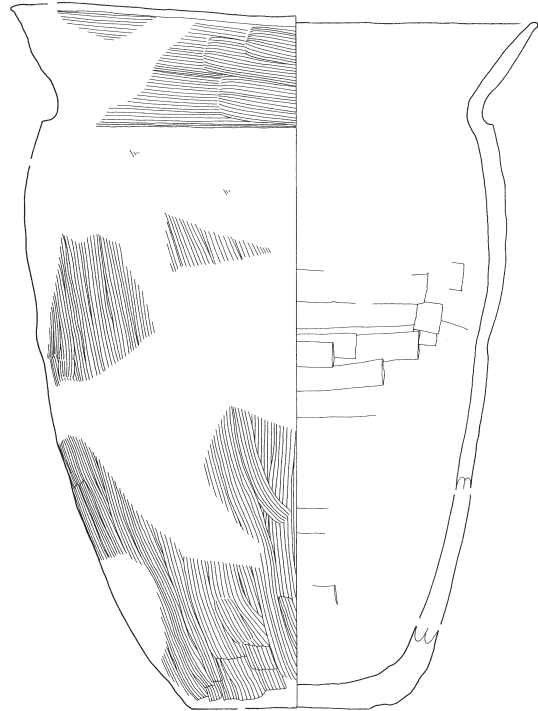
11(B1-A6-床面)



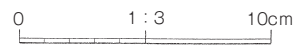
12(B1-B5-床面)



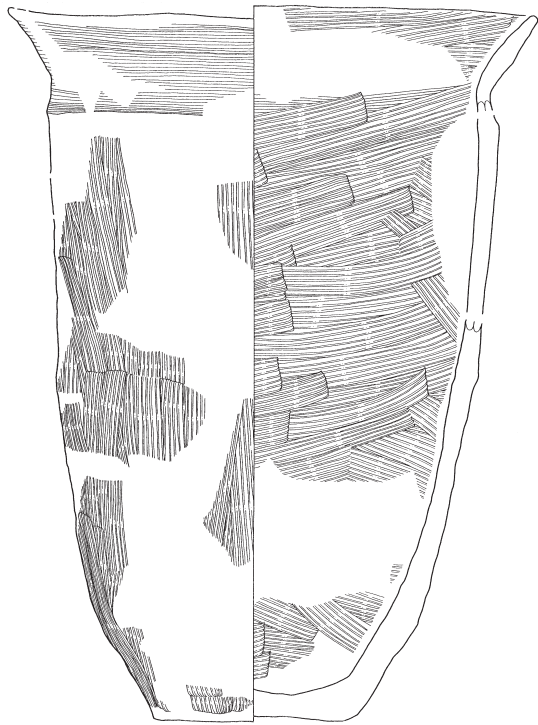
13(B1-B5-カマド右袖-K層)



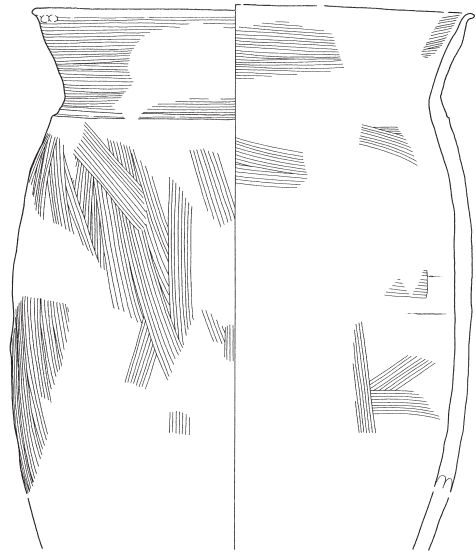
14(B1-B6-カマド-J層)



第8図 RA 042 竪穴建物跡出土遺物 (2)



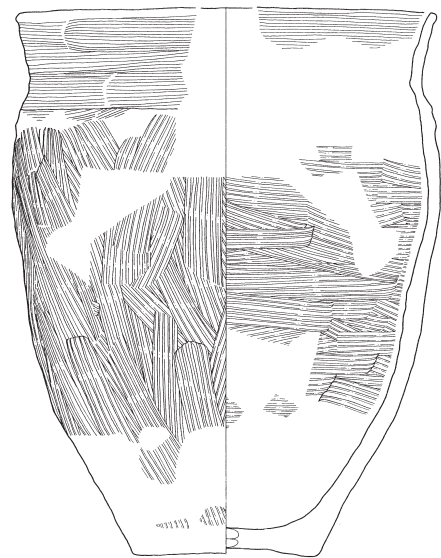
15(B1-B6-カマド右袖-K層)



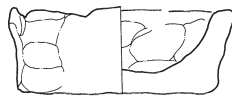
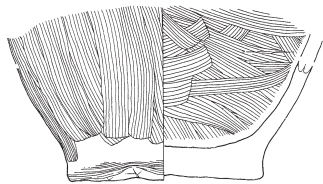
16(B1-A6-カマド左袖-K層)



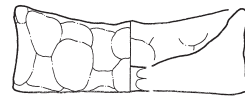
17(B1-A6-床面)



18(B1-A5-B4層)



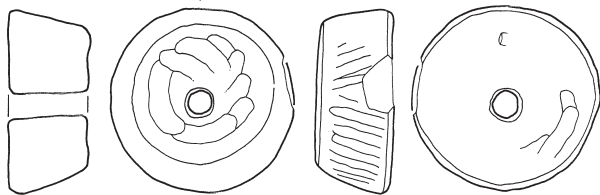
20(B1-B6-D2層)



21(B1-B6-D2層)



19(B1-B6-カマド支脚-床面)



22(B1-A6-床面)

(20~22は1:2)

0 1:3 10cm

第9図 RA 042 竪穴建物跡出土遺物 (3)

頸部と体部の境に段を持ち、口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にヘラナデを施す。18は口縁部から底部の約2/3が残存し、口縁部はあまり外反せず、頸部と体部の境にわずかに段が確認される。口縁部内外面にヨコナデ、体部内外面にハケメ調整を施す。19は底部付近のみ残存する。体部内外面にヘラナデを施し、底面には木葉痕が残る。20・21は小型の手捏ね土器である。内外面に指頭圧痕が認められる。20は底部の一部を欠損し、21は口縁部から底部の約2/3が残存する。22は土製紡錘車である。断面は台形で、中央部のやや中心から外れた部分に穿孔が施される。その他、図示していないが、土師器坏や土師器甕の破片が多く出土している。

ピット (第5図)

RA 042 堅穴建物の東 (B 1 - C 6) に位置しており、規模は径0.24 ~ 0.28 m、検出面から底面までの深さは0.75 mである。人為的に埋め戻されており、埋土はA層で3層に細分され、A₁、A₃層が粒状の暗褐色~褐色土を少量含む黒褐色土。A₂層が粒状の暗褐色土を含む褐色土である。柱痕跡は認められず、位置や規模などからカマドの煙出しに似ているが、これに伴う煙道やカマド基底部等は確認されなかったため、カマドの製作途中で放棄されたものではないかと考えられる。

3 調査のまとめ

盛岡周辺においてカマドが北~西の方向に構築される堅穴建物跡は、おおむね8世紀代までのもの(2008 遺跡の学び館)であり、RA 042 堅穴建物跡もこれにあたると思われる。これまでに本遺跡で確認されている堅穴建物跡は8世紀後半代を主体としており、この時期の遺物の特徴として、丸底から平丸底で体部に段もしくは稜を持つ非ロクロ成形の土師器坏があげられる。RA 042 堅穴建物跡からも、丸底の非ロクロ成形の土師器坏(第7図1~6)が出土しており、その特徴から8世紀中葉の年代が考えられる。遺物はカマドの周辺からまとまって出土しており、その用途から、カマド周辺に器を置く習慣があったならば、建物の使用時に近い遺物の出土状況であると考えられる。これは建物が緊急的に廃棄されたとも考えられるが、一方で、I期カマドを人為的に破壊し、煙道内部に坏を伏せた状態で置くなど、カマド廃絶時の儀礼行為とともれる痕跡も見受けられるため、当時このあたりでは、道具類を意図的に残して建物を廃棄する風習があったのではないかと考えられる。遺物がこのような状態で確認されるのは、第12・18次調査や第20・21次調査などでも同様であるが、今回の調査を含むこれまでの調査ではその明確な理由につながるような痕跡などは確認できなかったため、いずれも推測の域を出ない。今後周辺での調査を積み重ねながら考察していく必要があるだろう。

引用・参考文献

- 盛岡市教育委員会 2008 『盛岡市内遺跡群 - 平成18・19年度発掘調査報告書 -』
- 盛岡市教育委員会 2011 『西鹿渡遺跡 - 第25次発掘調査報告書 -』
- 盛岡市教育委員会 2011 『盛岡市内遺跡群 - 平成20・21年度発掘調査報告書 -』
- 廣瀬忠夫 盛岡市教育委員会 2018 『西鹿渡遺跡 - 「M stage 三本柳」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書 -』

Ⅲ 台太郎遺跡（第87・88次調査）

1 遺跡の環境

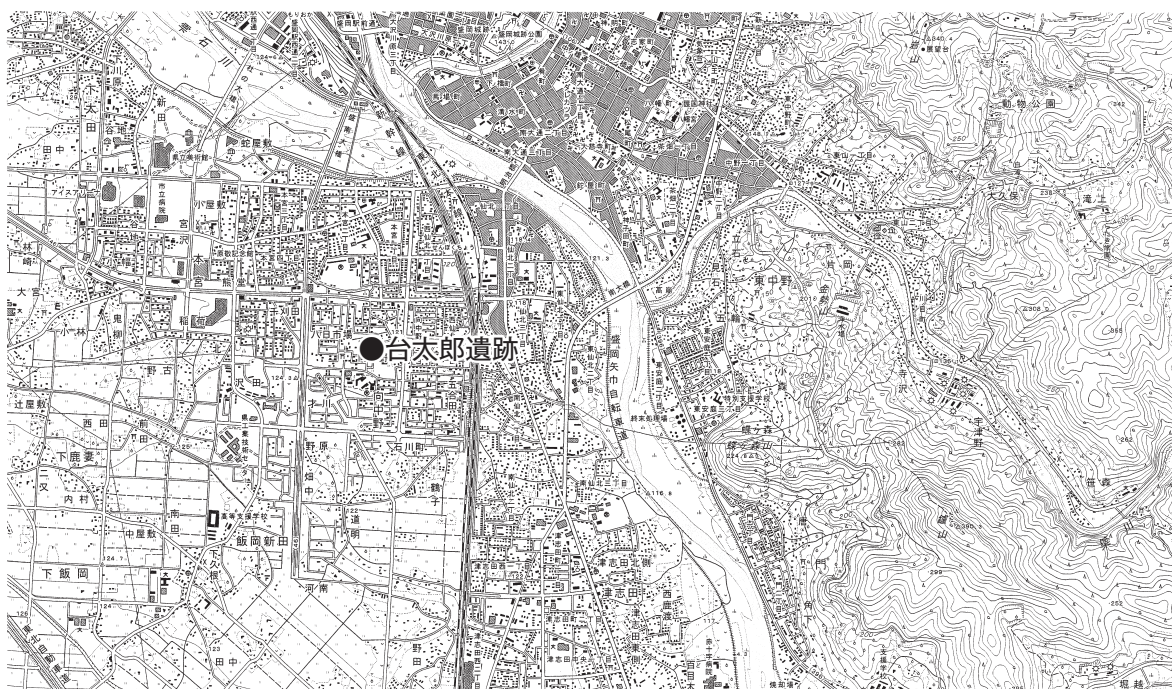
(1) 遺跡の概要

遺跡の位置 台太郎遺跡は、JR盛岡駅より南に約2.1kmの向中野地内に所在する（第10図）。かつてこの辺り一帯は水田・畑地・宅地などの農地が主体であったが、近年の盛岡南新都市開発整備事業（以下、「盛南開発」という）に係る土地区画整理事業により、急速に宅地化が進められた地域である。遺跡の範囲は東西約800m、南北約500mと推定され、標高は119～123mである。現況は宅地、学校及び商業地である。

地形・地質 雫石川は奥羽山脈より東流し雫石盆地を形成するが、烏泊山と箱ヶ森に挟まれた北ノ浦付近で流路が急激に狭められる。北ノ浦以東は雫石川・北上川によって形成された沖積地へと広がり、JR盛岡駅の南東約500mで北上川・中津川と合流する。雫石川南岸に広がる沖積段丘は、これまでに幾度となく流路を変えてきた雫石川により形成されており、台太郎遺跡はその沖積段丘上に立地している（第1図）。

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡 本遺跡の西側には本宮熊堂A・B遺跡、飯岡沢田遺跡、飯岡才川遺跡、南側には細谷地遺跡、向中野館遺跡が存在する。これらの遺跡は主に7世紀後半から10世紀代を中心とする古代の集落遺跡で、細谷地遺跡からは古代の竪穴建物跡が240棟以上確認され、飯岡沢田遺跡からは8世紀から9世紀の古墳や円形周溝が多く確認されている。また、台太郎遺跡や向中野館遺跡からは、中世の居館跡も確認されている。それぞれの遺跡は網状に広がる旧河道によって画されている。



第10図 台太郎遺跡の位置（1：50,000）

2 調査内容

(1) これまでの調査

台太郎遺跡は、昭和 60 年度の仙北西地区土地区画整理事業時の工事現場にて、平安時代の竪穴建物跡が発見され周知された遺跡である。平成 5 年度からは盛南開発に伴う発掘調査が主体を占め、以後平成 29 年度末で 91 次にわたって調査されており、7 世紀から 10 世紀の古代集落、中世の居館を中心とした集落跡や墓域、近世の村落跡などが確認されている。

古 代 古代（奈良・平安時代）の竪穴建物跡は平成 25 年度末で 700 棟以上を数え、そのほかに掘立柱建物跡（2×2 間総柱）や大溝跡などが確認されており、当時の「志波（斯波）」地域最大の集落といえる。遺構の分布をみると、7 世紀末～8 世紀の竪穴建物跡は重複がほとんどみられず、大型の竪穴建物跡と中型から小型のいくつかの竪穴建物跡でひとつのまとまりが構成され、南西部を除く遺跡全域に分布し、特に遺跡南部や南東部に多く確認されている。それに対し 9 世紀～10 世紀の竪穴建物跡は重複が著しく、遺跡の東部と西部、北部の段丘縁辺部に集中して分布している。個々の竪穴建物跡の特徴をみると、7 世紀末～8 世紀は北西カマドが圧倒的に多く、北東～南カマドがわずかにある程度で、カマドの造り替えは少ない。一方で 9 世紀～10 世紀は北西～北カマド、南東カマドなどさまざま、大型竪穴建物跡にカマドの造り替えが多くみられる。

中 世 中世（鎌倉～戦国時代）になると、12 世紀後半の渥美窯産の灰釉小型壺が遺跡北東部の微高地より単独出土している。13 世紀後半には遺跡中央部に不整長方形プランの居館が営まれ、周辺域には区画溝や道路跡、掘立柱建物跡、竪穴跡などが分布している。また、遺跡南東部には中世の土抗墓群、掘立柱建物跡、竪穴跡、現在の諏訪神社の周囲を囲むような堀跡や、社殿または仏堂らしい掘立柱建物跡も確認されており、これらは出土した陶磁器の年代から、15 世紀頃まで存続したと考えられる。居館北東側には幅 6m 内外で並行する道路側溝状の溝跡があり、この溝跡の東側には並行して区画整理工事前の道路も存在していた。この道は遺跡北東部の段丘崖や居館の堀、周辺の区画溝とも並行しており、居館や周辺村落と併存していた道路跡と考えられる。

近 世 近世（江戸時代）には雫石川は現在の流れとなり、旧河道の東側には城下の玄関口にあたる仙北組町がひらかれ、向中野はこの町の郊外となる。この時代の遺構としては、近世の向中野村の一部と考えられる掘立柱建物の曲屋跡や直屋跡などの遺構が遺跡内に点在するようになる。

(2) 平成 28 年度の調査

位 置 第 87・88 次調査区は、台太郎遺跡の中央部に位置し、第 23 次調査区の南、第 26 次調査区の東に隣接する（第 11 図）。調査区は住宅の基礎や埋設管等による削平・攪乱をうけている。調査区内はほぼ平坦な地形で、検出面の標高値は 120.200 m 前後である。

基本層序 調査区内で確認された基本層序は以下の I、II 層に大別される。I 層は表土で、旧建築物等の攪乱を受けている。II 層は褐色シルト層（地山）で、その上面が遺構検出面である。

検出状況 I 層を除去した II 層上面で遺構の検出を行った。

検出遺構 検出された遺構は奈良時代の竪穴建物跡 1 棟（R A 702）、竪穴跡 1 基（R E 097）、時期不詳の溝跡 1 条（R G 280）、土坑 1 基（R D 2213）である（第 12 図）。

次数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期 間	検出遺構・遺物	調査主体
1	向中野字台太郎 7-1	土地区画整理	734	1985.05.24-06.25	平安堅穴建物跡 3, 土坑 1, 溝跡 1	市教委
2	向中野字台太郎 7-1	土地区画整理	515	1985.07.01-07.31	平安堅穴建物跡 6, 堅穴跡 1 ほか	市教委
3	向中野字台太郎 18-1	倉庫建設	125	1985.11.13-11.30	奈良堅穴建物跡 1, 平安溝跡 1	市教委
4	向中野字台太郎 18-3	共同住宅等	1,130	1986.06.02-07.29	堅穴建物跡 (奈良 7, 平安 5) ほか	市教委
5	向中野字台太郎 11-7, 71-7	個人住宅建築	50	1989.05.10-05.11	平安堅穴建物跡 1	市教委
6	向中野字台太郎 7-1 外	個人住宅建築	302	1990.05.07-05.26	平安堅穴建物跡 7, 土坑 12 ほか	市教委
7	向中野字向中野 36-3	個人住宅建築	138	1991.04.25-05.08	奈良堅穴建物跡 1, 溝跡 2	市教委
8	向中野字台太郎 12-2 外	事務所建設	830	1991.06.17-06.27	堅穴建物跡 (奈良 3, 平安 2, 古代 3) ほか	市教委
9 試掘	向中野字向中野 40	小屋建築	50	1993.05.11	遺構・遺物なし	市教委
10 試掘	向中野字向中野地内	盛南開発	1,200	1995.04.04-04.06	奈良堅穴建物跡 8, 土坑 7, 溝跡 12 ほか	市教委
11 試掘	向中野字台太郎 9-3 外	倉庫建設	320	1995.06.19-06.27	遺構・遺物なし	市教委
12 試掘	向中野字八日市場地内	盛南開発	5,174	1995.09.01-11.30	古代堅穴建物跡 53, 土坑 34, 溝跡 58 ほか	市教委
13 試掘	向中野字向中野 1-45 外	盛南開発	4,064	1996.10.14-10.25	平安堅穴建物跡 1, 土坑 21, 溝跡 38 ほか	市教委
14	向中野字台太郎 18-1	下水管理設	25	1996.11.25-11.29	平安堅穴建物跡 1, 溝跡 1	市教委
15	向中野字八日市場 33-2 外	盛南開発	12,906	1997.04.04-11.26	堅穴建物跡 (奈良 10, 平安 52), 土坑 43 ほか	県埋文
16	向中野字向中野 36-1 外	盛南開発	790	1997.08.01-08.29	奈良堅穴建物跡 2, 溝跡 2, 堀跡 1 ほか	県埋文
17 試掘	向中野字向中野地内	下水管理設	10	1997.08.23	遺構・遺物なし	市教委
18	向中野字向中野 26-6 外	盛南開発	26,404	1998.04.15-11.20	堅穴建物跡 (古墳～奈良 42, 平安 65) ほか	県埋文
19	向中野字向中野 16-6 外	盛南開発	4,755	1998.07.02-08.31	奈良・平安堅穴建物跡 20, 堅穴跡 5 ほか	県埋文
20	向中野字向中野地内	盛南開発	1,400	1998.09.17-12.21	古代掘立柱建物跡 4, 柱列跡 1, 土坑 12 ほか	市教委
21 試掘	向中野字向中野 18-7	車庫建築	28	1998.09.25	遺構・遺物なし	市教委
22	向中野字向中野 39-1 外	警察宿舍建設	2,500	1999.09.01-11.02	縄文土坑 1, 奈良堅穴建物跡 1 ほか	県埋文
23	向中野字向中野 16-15	盛南開発	27,800	1999.04.16-11.15	堅穴建物跡 (古墳～奈良 35, 平安 27) ほか	県埋文
24	向中野字向中野地内	盛南開発	3,425	1999.05.06-07.16	堅穴建物跡 (奈良・平安 20) ほか	市教委
25	向中野字八日市場地内	盛南開発	3,674	1999.07.07-12.15	堅穴建物跡 (奈良・平安 37) ほか	市教委
26	向中野字向中野 16-15 外	盛南開発	13,662	2000.04.19-10.30	堅穴建物跡 (古墳～奈良 34・平安 34) ほか	県埋文
27	向中野字八日市場地内	盛南開発	2,513	2000.06.12-11-14	奈良・平安堅穴建物跡 21, 土坑 23 ほか	市教委
28	向中野字八日市場地内	盛南開発	460	2000.06.29-09.08	平安堅穴建物跡 9, 掘立柱建物跡 2 ほか	市教委
29	向中野字向中野 20-2	盛南開発	125	2000.07.19-08.25	奈良堅穴建物跡 1, 近世土坑 3 ほか	市教委
30	向中野字八日市場 43-1	盛南開発	35	2000.07.25-07.31	平安堅穴跡 1, ビット	市教委
31	向中野字八日市場 45-2	盛南開発	128	2000.08.01-08.08	奈良・平安堅穴建物跡 2, 溝跡 2	市教委
32	向中野字八日市場 42 外	盛南開発	1,030	2000.09.18-10.20	奈良・平安堅穴建物跡 6, 土坑 7 ほか	市教委
33	向中野字八日市場 50	盛南開発	695	2000.09.22-10.13	古代堅穴建物跡 3, 溝跡 3	市教委
34 試掘	向中野二丁目 4-1 外	共同住宅建設	156	2000.11.20-11.22	古代堅穴建物跡 3, 溝跡 1	市教委
35	向中野字向中野 37-3 外	盛南開発	4,394	2001.04.17-08.02	堅穴建物跡 (奈良 5, 平安 10), 土坑 4 ほか	県埋文
36	向中野字向中野 37-4 外	盛南開発	290	2001.05.22-06.05	ビット 4	県埋文
37	向中野字向中野 20-1 外	盛南開発	872	2001.05.28-06.22	奈良堅穴建物跡 1, 土坑 5, 溝跡 2	市教委
38	向中野字向中野 15-1, 3-4	盛南開発	309	2001.06.01-06.15	遺構・遺物なし	市教委
39	向中野字向中野 20-1 外	盛南開発	1,302	2001.08.01-11.02	奈良・平安堅穴建物跡 12, 土坑 10 ほか	市教委
40	向中野字八日市場 41-2	個人住宅建築	300	2001.08.01-09.19	平安堅穴建物跡 3, 土坑 4, 堅穴跡 1 ほか	市教委
41	向中野字八日市場 45-9	個人住宅建築	220	2001.08.02-09.19	堅穴建物跡 (奈良 4, 平安 2), 土坑 3 ほか	市教委
42	向中野字八日市場 28-4	盛南開発	123	2001.11.26-12.12	平安堅穴建物跡 1, 土坑 2, 溝跡 3	市教委
43	向中野字向中野 22 外	盛南開発	112	2001.11.26-12.12	遺構・遺物なし	市教委
44	向中野字八日市場 41-1	盛南開発	2,907	2002.04.09-08.05	堅穴建物跡 (古墳～奈良 11, 平安 9) ほか	県埋文
43 補	向中野字向中野 22 外	盛南開発	42	2002.04.22	遺構・遺物なし	市教委
45	向中野字八日市場 30-2 外	盛南開発	1,618	2002.05.07-08.09	平安堅穴建物跡 13, 堅穴跡 4, 土坑 36 ほか	市教委
46	向中野字向中野 35-2 外	盛南開発	334	2002.10.11-11.12	奈良堅穴建物跡 2	市教委
47 試掘	向中野二丁目 1-7	共同住宅建設	184	2002.11.06	遺構・遺物なし	市教委
48 試掘	向中野二丁目 5-8, 5-9	店舗建設	326	2002.11.21-11.22	古代堅穴建物跡 12, 土坑 3, 溝跡 6 ほか	市教委
49 試掘	向中野一丁目 17-2 の一部	共同住宅建設	48	2002.12.24-12.25	遺構・遺物なし	市教委
50	向中野字向中野 37-5 外	盛南開発	540	2003.06.02-11.10	古代土坑 2, 溝跡 2, ビット	県埋文
51	向中野字八日市場 8-4 外	盛南開発	6,616	2003.04.11-11.10	堅穴建物跡 (縄文 4, 奈良～平安 22) ほか	県埋文
52	向中野字八日市場 7-1 外	国道建設	595	2003.08.01-09.03	平安建物跡 1, 溝跡 8	県埋文
53	向中野字向中野 37-3 外	盛南開発	240	2004.05.06-06.02	古代溝跡 5, 土坑 1	県埋文
54	向中野字向中野 19 外	盛南開発	5,052	2004.04.12-08.06	堅穴建物跡 (古墳～奈良 4, 平安 9) ほか	県埋文
55	向中野字向中野 35-26	個人住宅建築	203	2004.06.07-07.09	古墳～奈良堅穴建物跡 1, 堅穴跡 1 ほか	市教委
56	向中野字向中野 20-2 外	盛南開発	50	2005.06.20-06.21	平安土坑 1	市教委
57	向中野字向中野 9 外	盛南開発	1,047	2005.06.06-08.05	平安堅穴建物跡 6, 掘立柱建物跡 2 ほか	市教委
58	向中野字向中野 40-16 外	盛南開発	3,945	2006.08.07-11.24	堅穴建物跡 (奈良 10, 平安 1) ほか	県埋文
59	向中野字向中野 9 外	盛南開発	1,830	2007.07.05-09.26	奈良堅穴建物跡 2, 掘立柱建物跡 2 ほか	市教委
60	向中野字向中野 40-8 外	盛南開発	791	2007.08.01-09.06	土坑 4, ビット	市教委

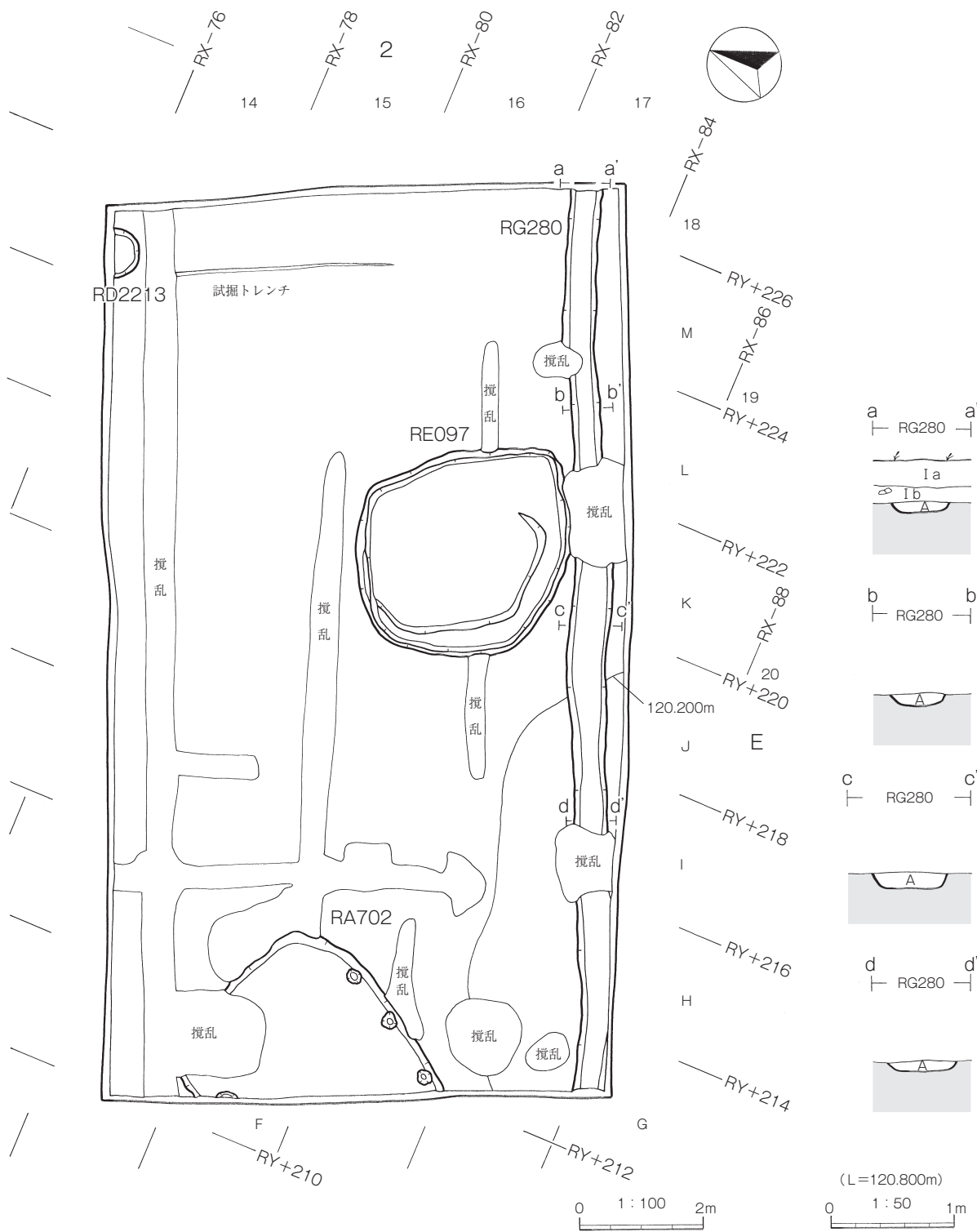
第3表 台太郎遺跡調査一覧(1)

次数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期 間	検出遺構・遺物	調査主体
61	向中野字向中野 17-4 外	盛南開発	610	2007.10.26-11.16	奈良堅穴建物跡 1, 土坑 4, ビット	市教委
62	向中野字向中野 40-7 外	盛南開発	862	2008.06.18-07.09	土坑 1, ビット	市教委
63	向中野字向中野 17-1 外	盛南開発	1,698	2008.07.03-10.31	古代堅穴建物跡 2, 堅穴跡 1, 土坑 4 ほか	市教委
64	向中野字向中野 21-2 外	盛南開発	621	2008.11.19-12.12	土坑 1	市教委
65	向中野字向中野 40-16 外	盛南開発	330	2009.04.17	遺構・遺物なし	市教委
66	向中野字向中野 42-25 外	盛南開発	11,911	2009.06.01-11.27	古代堅穴建物跡 5, 掘立柱建物跡 72 ほか	県埋文
67	向中野字八日市場 23-1 外	盛南開発	856	2009.05.07-07.28	古代堅穴建物跡 2, 土坑 2, 溝跡 1	市教委
68	向中野字八日市場 30-1 外	盛南開発	1,234	2009.07.01-11.06	古代堅穴建物跡 13, 堅穴跡 3, 土坑 10 ほか	市教委
69	向中野字向中野 18-4 外	盛南開発	76	2009.10.01	遺構・遺物なし	市教委
70	向中野字向中野 13-1 外	盛南開発	1,914	2009.10.21-12.24	古代堅穴建物跡 4, 堅穴跡 4, 溝跡 2	市教委
71 試掘	向中野一丁目 10, 15 外	店舗建設等	1,341	2010.08.09-08.12・18	古代堅穴建物跡 32, 土坑 7, 溝跡 8 ほか	市教委
72	向中野字向中野 35-34 外	盛南開発	506	2010.10.21-12.17	奈良堅穴建物跡 1, 堅穴跡 2, 土坑 5 ほか	市教委
73 試掘	向中野一丁目 15, 16-12 外	宅地造成	587	2011.04.04-04.05	古代堅穴建物跡 7, 溝跡 2	市教委
73			4,360	2011.05.09-07.21	平安堅穴建物跡 8, 堅穴跡 7, 土坑 21 ほか	
74	向中野字八日市場 30-1 外	盛南開発	1,120	2011.05.30-07.15, 09.06-11.11	堅穴建物跡 (奈良 7, 平安 3), 土坑 16 ほか	市教委
75 試掘	向中野一丁目 9-19	共同住宅建設	21	2012.11.22	遺構・遺物なし	市教委
76 試掘	向中野二丁目 6-2	宅地造成	117	2013.03.12-03.13	古代堅穴建物跡 10, 溝跡 1	市教委
77	向中野二丁目 7-2	店舗建設	516	2013.05.01-06.04	平安堅穴建物跡 2, 掘立柱建物跡 1 ほか	市教委
78	向中野二丁目 3-11	個人住宅建築	55	2013.06.12-06.21, 07.04-07.24	平安堀跡 1, 古代土坑 1, 溝跡 1	市教委
79	向中野二丁目 3-3	個人住宅建築	67	2013.06.12-06.21, 07.04-07.24	奈良堅穴建物跡 1, 土坑 1 ほか	市教委
80	向中野二丁目 6-2	宅地造成	1,155	2013.07.22-12.02	堅穴建物跡 (奈良 3, 平安 28), 土坑 27 ほか	市教委
81 試掘	向中野二丁目 3-8	貸家住宅建築	63	2014.10.08	遺構・遺物なし	市教委
82 試掘	向中野二丁目 5-7	宅地造成	53	2015.04.17	遺構なし・あかやき土器片	市教委
83 試掘	向中野二丁目 3-4	共同住宅建設	102	2015.07.07	遺構・遺物なし	市教委
84 試掘	向中野一丁目 12-9	宅地造成	72	2015.07.15	遺構なし・土師器・須恵器片	市教委
85 試掘	向中野一丁目 12-9	宅地造成	71	2015.07.15	平安土坑 1・土師器・須恵器片	市教委
86 試掘	向中野二丁目 37-68	個人住宅建築	84	2015.12.15	古代堅穴建物跡 5, 土坑 2, 溝跡 1 ほか	市教委
87	向中野二丁目 37-68	個人住宅建築	61	2016.05.16-06.03	奈良堅穴建物跡 1, 堅穴跡 1, 古代溝跡 1	市教委
88	向中野二丁目 37-68	個人住宅建築	61	2016.05.16-06.03	奈良堅穴跡 1, 古代土坑 1, 溝跡 1	市教委
89 試掘	向中野二丁目 3-7	共同住宅建設	29	2016.12.21	平安堅穴建物跡 2	市教委
90	向中野二丁目 3-7	共同住宅建設	33	2017.04.10-04.21	平安堅穴建物跡 1	市教委
91 試掘	向中野一丁目 18-11	共同住宅建設	35	2017.06.30	古代以降溝跡 1	市教委

第 4 表 台太郎遺跡調査一覧 (2)



第 11 図 台太郎遺跡全体図

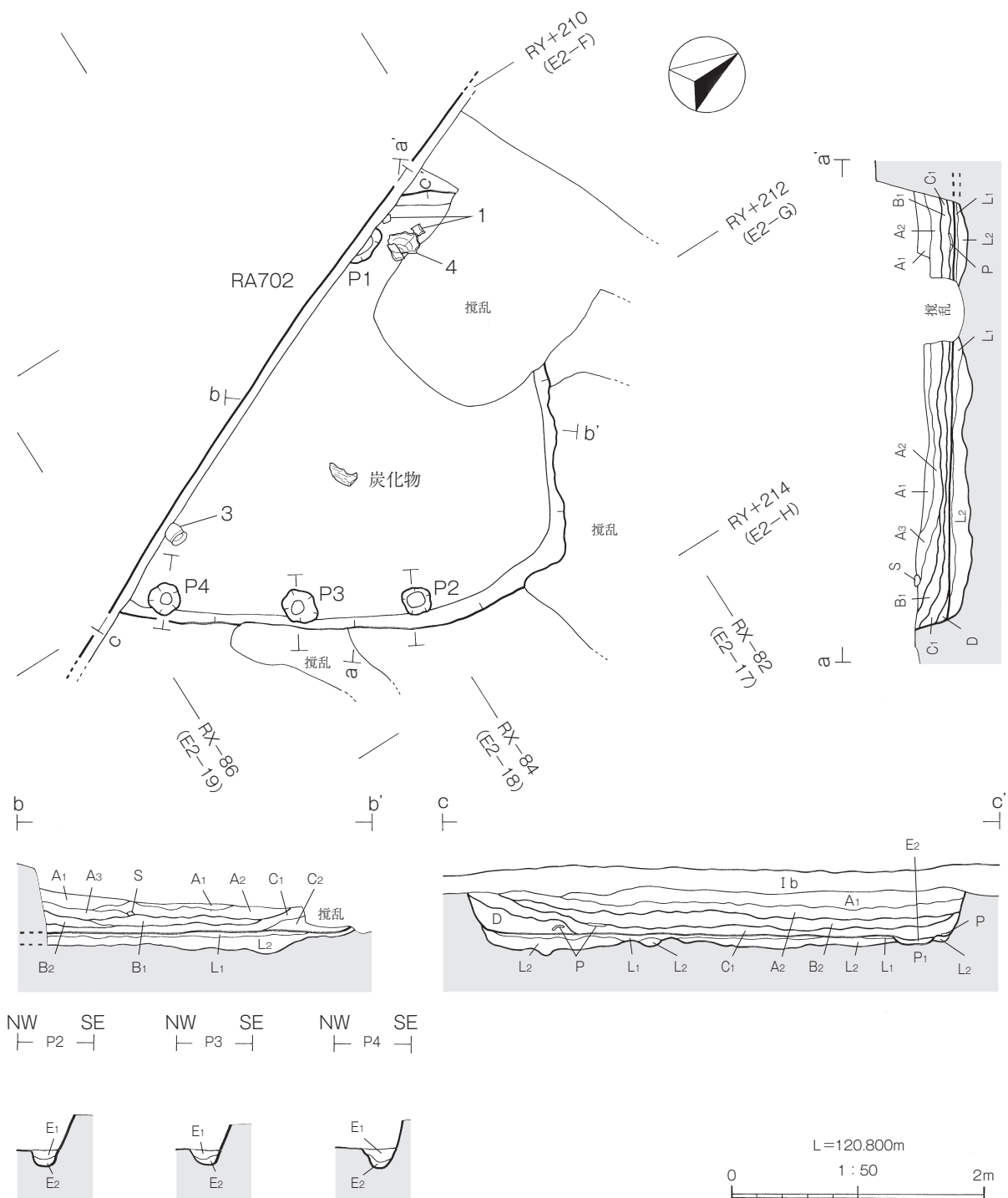


第 12 図 台太郎遺跡第 87・88 次調査全体図, R G 280 溝跡

遺構・遺物

RA702 竪穴建物跡 (第13図)

位置	調査区西側	平面形	方形(調査区外)	主軸方向	-
規模	北西-南東 3.40 m	南西-北東 3.30 m	重複関係	なし	
検出面	Ⅱ層上面	掘込面	削平	カマド	調査区外
埋土	自然堆積でA~D層に大別され、A層はさらに3層、B・C層はさらに2層に細分される。 A ₁ 層-黒褐色土を主体とし、粉~小粒状の暗褐色土を微量に含み、やや硬く締りが強い。 A ₂ 層-黒褐色土を主体とし、粉~小塊状の褐色土を少量含み、やや硬く締りが強い。 A ₃ 層-黒褐色土を主体とし、粉~小塊状の暗褐色土を微量に含み、やや硬く締りが強い。 B ₁ 層-黒色土を主体とし、粉~小粒状の褐色土を微量に含む。 B ₂ 層-黒色土を主体とし、粉~小塊状の褐色土を微量に含む。 C ₁ 層-黒褐色土を主体とし、小粒~小塊状の褐色土を微量に含む。 C ₂ 層-黒褐色土を主体とし、小粒~小塊状の褐色土を微量に含む。 D層-粉~小粒状の黒褐色土を微量に含む暗褐色土で、やや軟らかい。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.17~0.35 mで、外傾して立ち上がる。				
床の状態	ほぼ平坦で構築土(L層)は2層に細分され、L ₁ 層は褐色シルトを主体とし、粒状の黒褐色土を多量に含み、やや硬く締まる。L ₂ 層は暗褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを含み締りがある。				
柱穴	ピットを床面上に4口検出しているが、いずれも柱痕跡は確認されなかった。埋土はE層で2層に細分される。E ₁ 層は黒褐色土を主体とし、粉~小粒状の暗褐色土を含む。E ₂ 層は暗褐色土を主体とし、粉~小粒状の黒褐色土を含む。さらにP2はE ₂ 層中ににぶい黄褐色の粘土塊を少量含む。各ピットの規模・深さは、P1-径0.32 m、深さ0.10 m、P2-径0.22~0.44 m、深さ0.13 m、P3-径0.25~0.30 m、深さ0.10 m、P4-径0.24~0.26 m、深さ0.14 mである。				
出土遺物 (第15図1~6)	1・2は土師器甕である。1は体部半周のみが残存しており、他は欠損している。外面に縦方向のヘラミガキ、内面に横方向のハケメ調整を施す。2は口縁部から体部上半のみ残存し、体部下半以下は欠損している。頸部と体部の境に段を持つ器形で、口縁部内外面にヨコナデ、体部外面に縦方向のヘラミガキ、内面に横方向のハケメ調整を施す。3は完形の土師器小型甕である。器高より口径が広く、頸部と体部の境に段を持つ器形で、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケメ調整の後に縦方向・横方向のヘラミガキ調整を施す。体部内面は横方向のヘラミガキとヘラミガキ調整を交互に施す。4は土師器球胴甕である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメ調整の後、縦方向・横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はハケメ調整の後に、ヘラミガキ調整を施す。5は土師器小型壺である。頸部から体部の一部分のみ残存し、体部外面にヘラミガキ調整を施す。6は溶岩質安山岩製の砥石である。敲打痕や切創が確認できる。その他、図示していないが、土師器坏や土師器甕の破片などが出土している。				
時期	8世紀後半から9世紀前葉				



第 13 図 R A 702 竖穴建物跡

RE097 竪穴跡 (第14図)

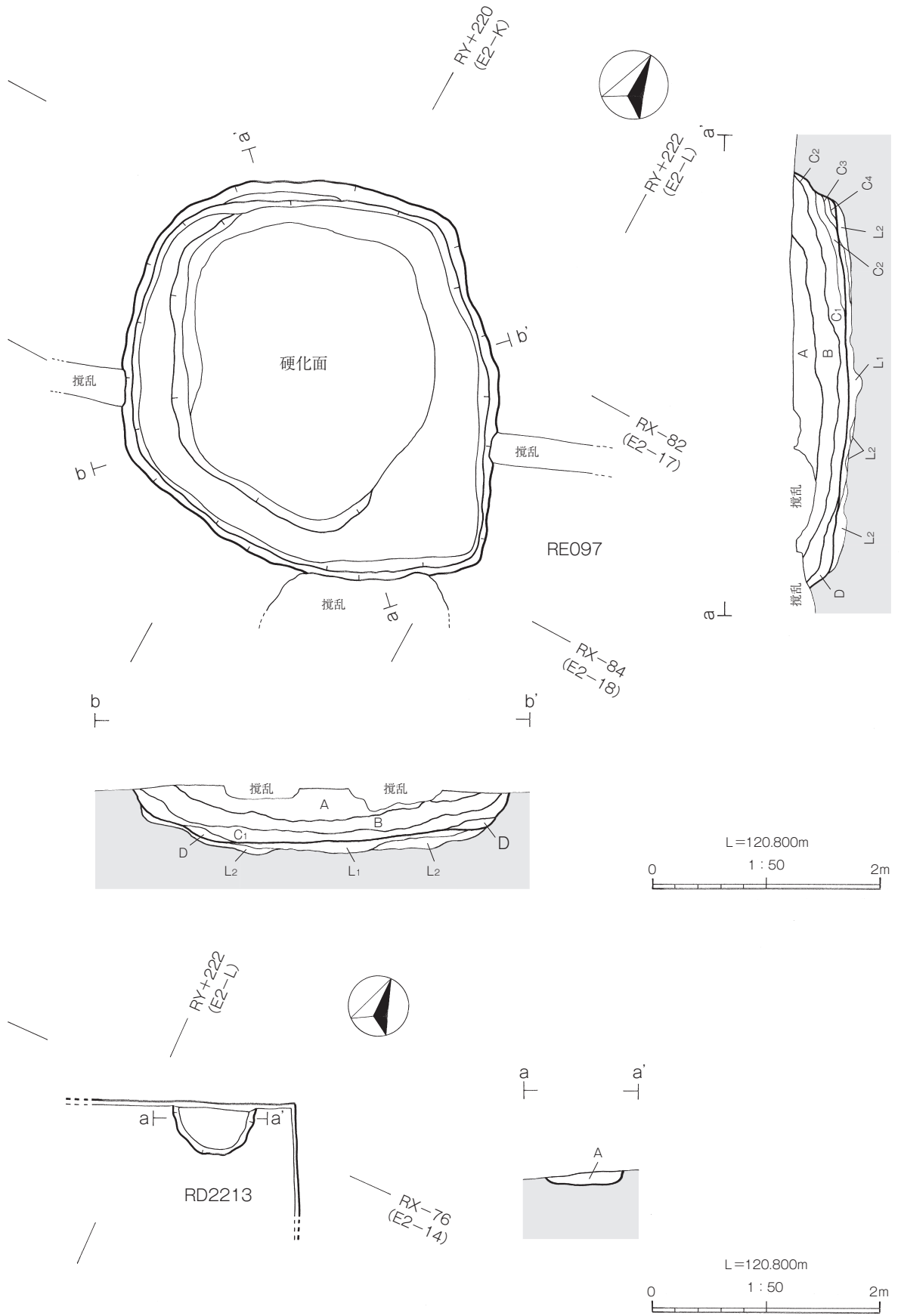
位置	調査区中央	平面形	不整形	主軸方向	—
規模	北西-南東 3.50 m	南西-北東	3.25 m	重複関係	なし
検出面	Ⅱ層上面	掘込面	削平	時期	8世紀中葉
埋土	自然堆積でA~D層に大別され、C層はさらに4層に細分される。 A層-粉~粒状の暗褐色土を微量に含むややグライ化した黒色土で、やや硬くやや締る。 B層-ややグライ化した黒褐色土を主体とし、粉~塊状の褐色土を多く含み、塊状の黒色土、層状の黒褐色土、粒状の暗褐色土を微量に含む。 C ₁ 層-塊~層状のやや粘性のある黒色土を少量含む黒褐色土で、粒~小塊状の褐色土、塊状のやや粘性のあるにぶい褐色土を微量に含み、やや締る。 C ₂ 層-粉~小粒状の暗褐色土を多量に含む黒褐色土で、床面付近でややグライ化する。 C ₃ 層-粉~小粒状の暗褐色土を少量含む黒褐色土。 C ₄ 層-粉~層状の暗褐色土を多量に含む黒褐色土。 D層-暗褐色土を主体とし、粉~塊状の黒褐色土を少量、小粒状の暗褐色土を微量に含む。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.30~0.47 mで、外傾して立ち上がる。				
床の状態	中央部がやや低いレンズ状で、南西壁際の幅0.15~0.30 mの範囲が一段高い。構築土(L層)は2層に細分され、L ₁ 層は塊状の黒褐色土を含むグライ化した灰黄褐色土。L ₂ 層は粉~塊状の暗褐色土を多量、小粒状の褐色土を微量に含む褐色土。L _{1,2} 層間に硬い酸化鉄層が広がる。				
出土遺物 (第15図7~9)	7・8は土師器の坏である。7は体部に緩い段を持つ丸底で、内面に黒色処理とヘラミガキを施す。8は体部に緩い段を持つ丸底で、内外面にヘラミガキを施す。8は土製の紡錘車である。1/3を欠損し、磨滅する。断面は台形で、中央部に穿孔が施される。その他、図示していないが、土師器坏や土師器甕の破片、朱彩の土師器片などが出土している。				

RG280 溝跡 (第12図)

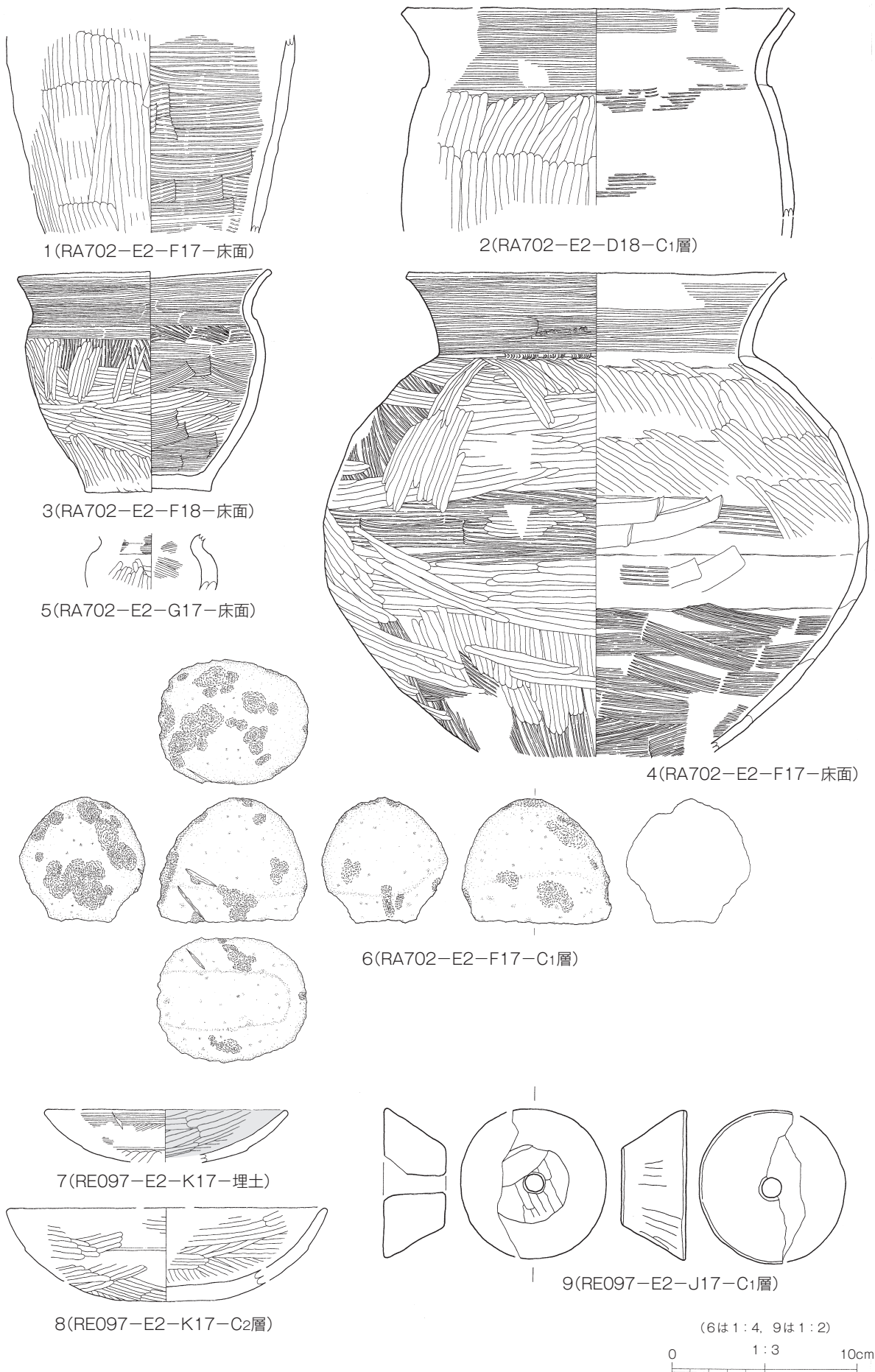
位置	調査区南	平面形	南西から北東方向にほぼ直線状にのびる (調査区外)。		
規模	総延長 14.45 m以上、上端幅 - 0.42 ~ 0.63 m、下端幅 - 0.25 ~ 0.50 m				
重複関係	なし	掘込面	削平	検出面	Ⅱ層上面
埋土	自然堆積で黒褐色土を主体とし、粉~塊状の暗褐色土を含み、やや硬くやや締る。				
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.08~0.14 mで外傾して立ち上がる				
底の状態	ほぼ平坦である。	出土遺物	なし	時期	古代

RD2213 土坑 (第14図)

位置	調査区東	平面形	円形 (調査区外)		
規模	長軸-上端 0.70 m、下端 0.62 m、短軸-上端 0.41 m以上、下端 - 0.37 m以上				
重複関係	なし	掘込面	削平	検出面	Ⅱ層上面
埋土	自然堆積で黒褐色土を主体とし、粉~小粒状のにぶい黄褐色土を少量含み、やや締まる。				
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.12 mで外傾して立ち上がる。				
底の状態	ほぼ平坦である。	出土遺物	なし	時期	古代以降



第 14 図 RE 097 豎穴跡・RD 2213 土坑



第 15 図 RA 702 竪穴建物跡・RE 097 竪穴跡出土遺物

(3) 調査のまとめ

今回の調査で精査した遺構は、奈良時代の竪穴建物跡1棟（R A 702）、竪穴跡1基（R E 097）、時期不詳の溝跡1条（R G 280）、土坑1基（R D 2213）である。

竪穴建物跡 調査区西側で確認されたR A 702 竪穴建物跡の規模は約3.4 m×3.3 mの方形で、建物のおよそ半分が調査区外にあると思われる。今回の調査ではカマドは確認されなかったが、台太郎遺跡で確認されている奈良時代の竪穴建物の多くが北西カマドであり、西側に隣接する第26次調査では、北西方向のカマドをもつ奈良時代を中心とする竪穴建物跡がまとまって複数棟確認されていることから、これらと同時期のものである可能性があり、R A 702 竪穴建物跡も調査区外の北西方向にカマドをもつものと考えられる。R A 702 竪穴建物跡の年代については、出土遺物から8世紀後半から9世紀前葉と考えられる。また、出土した炭化材の放射性炭素（¹⁴C）の年代測定による暦年代推定と樹種同定を行っており、いずれも出土遺物からの推定年代を含む年代という結果が出ている（附章参照）。

竪穴跡 調査区中央で確認されたR E 097 竪穴跡の規模は約3.5 m×3.3 mの不整形で、カマドや柱穴は確認されなかった。底面の広い範囲（中央部分はL₁・L₂層間）に非常に硬い酸化鉄層が確認されることから、構築土に鉄分が多く含まれていたか、遺構の機能時もしくは埋没後に水分や鉄分の多い状態であった可能性がある。遺構底部は中央が低く、南西壁際がやや高いテラス状の構造になっている。このテラス状の構造については、同遺跡第73次調査のR E 089・093 竪穴建物跡や、隣接する第22次調査のR D 827 土坑に類似する部分もあるが、R E 093 竪穴跡には底面に酸化鉄が確認できるものの、R E 089 竪穴建物跡同様時期が異なり、R D 827 土坑は規模も小さく酸化鉄層も確認されていない。いずれの遺構も詳細は分かっておらず、R E 097 竪穴跡については、周辺遺跡において類例に乏しく、テラス状の構造を含めた遺構の用途・性格等については不明である。R E 097 竪穴跡の年代は出土遺物などから8世紀中葉と考えられる。

溝跡 調査区南側に確認されたR G 280 溝跡の規模は幅約0.4 m～0.6 m、総延長は14.5 m以上である。東側に隣接する第22次調査で確認された溝跡（R G 280）の延長線上から確認されたため、その溝跡の続きと考えられる。遺構番号は第22次調査のものをそのまま用いた。この遺構は第22次調査において磨滅した土師器片が出土している程度で、今回の調査でも遺物は確認されなかったため、時期の特定には至らなかった。

引用・参考文献

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 『台太郎遺跡第22次発掘調査報告書』

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『台太郎遺跡第26次発掘調査報告書』

盛岡市教育委員会 2005 『盛岡市内遺跡群－平成15年度・16年度発掘調査報告－』

盛岡市教育委員会 2014 『盛岡市内遺跡群－平成24・25年度発掘調査報告書－』

徳清倉庫株式会社 盛岡市教育委員会 2012 『台太郎遺跡－「フローラルアベニュー向中野」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書－』

徳清倉庫株式会社 盛岡市教育委員会 2015 『台太郎遺跡－「フローラルアベニュー向中野2丁目」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書－』

IV 西黒石野遺跡（第14次調査）

1 遺跡の環境

（1）遺跡の概要

遺跡の位置 西黒石野遺跡は、JR盛岡駅より北に約4.5kmの黒石野二丁目地内に所在する（第16図）。

遺跡範囲は東西約600m、南北約500mと推定され、標高は148～170m前後である。かつては畑や果樹園などが多く見られたが、現況は宅地が主である。

地形・地質 西黒石野遺跡は、北上川東岸四十四田丘陵の裾に発達する河岸段丘西側に位置し、段丘は四十四田丘陵より流れる沢の開析により、いくつもの舌状地形に分かれており、全体的に起伏の多い地形となっている。西黒石野遺跡を含む周辺一帯は、洪民火山灰層、分れ火山灰層など洪積～沖積世の火山灰で覆われている。本遺跡では北東部が最も標高が高く、南西にかけて緩やかに下がり続ける地形となっている。遺跡範囲の中で当該調査区周辺が最も標高が低い。

（2）歴史的環境

周辺の遺跡 西黒石野遺跡をはじめ、四十四田丘陵には数多くの遺跡が立地している。本遺跡の東には、7世紀の土師器甕、衝角付冑、環状錫製品、琥珀原石などの副葬品が出土した上田蝦夷森古墳群、南には黒石野平遺跡（縄文時代早期～晩期、平安時代）、右京長根遺跡（縄文時代）、高松神社裏遺跡（縄文時代前期～中期、平安時代）など、縄文時代から平安時代にかけての遺跡が分布している。また、近世の奥州道中の街道筋にあたり、上田一里塚（県指定史跡）が築かれている。



第16図 西黒石野遺跡の位置（1：50,000）

2 調査内容

(1) これまでの調査

盛岡市教育委員会による発掘調査は、平成2年の宅地造成に伴う第1次調査以降、平成30年度まで15次にわたって実施されている。平成15年の第11次調査では、縄文時代早期の竪穴建物跡から無文土器や貝殻文土器を主体とした、縄文時代早期初頭～中葉の土器が多量に出土した。平成22年の第13次調査では、縄文時代前期の竪穴建物跡から大木2a～2b式に相当する土器が出土している。さらに江戸時代の土坑墓が11基確認され、副葬品として、被葬者が生前使用したとされる陶磁器、古銭、煙管、鏡、簪が出土した。

回数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期間	検出遺構・遺物
1	黒石野二丁目7外	宅地造成	3,180	1990.05.07-07.28	縄文早～中期竪穴建物12, 土坑75, 平安竪穴建物1, 土坑1, 近世以降溝6
2 試掘	黒石野二丁目14-46外	個人住宅建築	258	1990.09.11	遺構・遺物なし
3 試掘	黒石野二丁目18-1外	店舗建設	366	1992.11.09	遺構・遺物なし
4 試掘	黒石野二丁目8-8外	共同住宅建築	116	1993.05.18	遺構・遺物なし
5 試掘	黒石野二丁目7-15	個人住宅建築	33	1994.05.13	遺構・遺物なし
6	黒石野三丁目139-7外	個人住宅建築・宅地造成	470	1995.09.25-10.06	縄文中～晩期遺物包含層, 平安竪穴建物2, 時期不詳土坑5, ピット58
7	黒石野二丁目8の一部	個人住宅建築	770	1996.05.10-05.24	縄文陥し穴11, 土坑3
8	黒石野三丁目146-2外	宅地造成	297	1998.10.22	遺構・遺物なし
9 試掘	黒石野二丁目15-1外	宅地造成	1,864	1995.12.18-12.20	遺構・遺物なし
10	黒石野二丁目20, 21の一部	宅地造成	2,889	1998.11.04-12.15	縄文土坑26, 平安竪穴跡2
11	黒石野二丁目14-1外	宅地造成	6,630	2003.08.18-12.04	縄文早期竪穴建物2, 縄文中～後期陥し穴69, 平安土坑1
12	黒石野二丁目28-1外	共同住宅建築	430	2009.06.01-06.22	縄文陥し穴10, 江戸大溝1, 時期不詳溝1, 土坑1
13	黒石野二丁目35-22外	個人住宅建築	350	2010.06.10-06.29	縄文前期竪穴建物1, 土坑4, 江戸土坑墓11
14	黒石野二丁目35-32	個人住宅建築	36	2016.12.15-12.16	縄文前期初頭～弥生前期遺物包含層
15 試掘	黒石野二丁目26-3外	宅地造成	385	2018.04.16-04.18	遺構なし

第5表 西黒石野遺跡調査一覧

(2) 平成28年度の調査

西黒石野遺跡における平成28年度の調査は第14次調査の1件である。個人住宅建築に伴うもので、国庫補助事業として調査を実施した。

位置 第14次調査区は、西黒石野遺跡の南西部に位置し、第13次調査区の北西に隣接する(第17図)。調査区は旧住宅の基礎や埋設管等による削平・攪乱をうけており、調査区中央部はほぼ平坦で、残存地形は削平された部分を取り囲む狭い範囲に留まっている(第18図)。調査区南西部で縄文時代前期初頭～弥生時代前期初頭の遺物包含層を確認した(第18図)。調査区内は北東から西方向に緩やかに傾斜する地形で、検出面の標高値は149.000 m前後である。なお、遺構は確認できなかった。



第 17 図 西黒石野遺跡全体図

(3) 遺物包含層

第14次調査区は、過去の削平などを受けており、旧地形及び包含層の残存状況があまり良くない。調査区南西部で縄文時代前期初頭～弥生時代前期初頭の遺物包含層（Ⅰ・Ⅱ層）を確認したのみである。調査区の地形は西方向に傾斜しており、遺物包含層もその傾斜に沿って形成されている。遺物包含層は縄文時代前期初頭～弥生時代前期初頭の遺物が混在しており、大半の出土遺物は第13次調査区を含む、東側からの流入による二次堆積と考えられる。全て破片状態で、完形または復元可能な個体は認められない。今回は図示していないが、平安時代と思われる土師器破片も2点出土している。

層位 Ⅰ層－表土・盛土層。黒褐色土を主体とする。Ⅰa・Ⅰb層に細分され、Ⅰb層に関しては、黒色土が主体となっている。

Ⅱ層－暗褐色土を主体とし、粒～小塊状の褐色土を含む。Ⅱa・Ⅱb層に細分され、Ⅱb層は褐色土の割合が多くなる。

Ⅱ層より下は黄褐色シルト主体の地山層が存在し、硬く締まりがあり、遺物は伴わない。



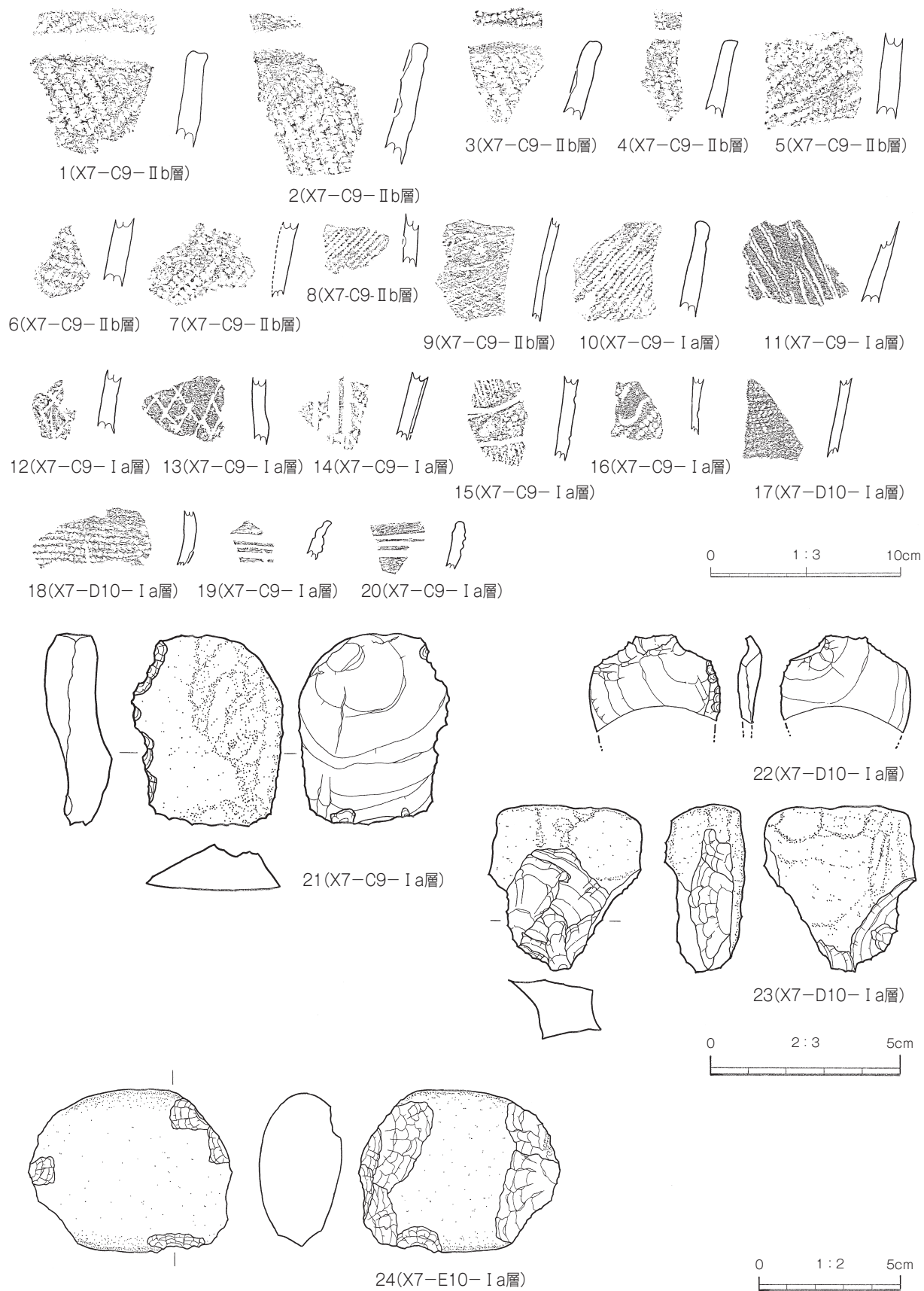
第18図 西黒石野遺跡第14次調査全体図

- 土 器 1～8はⅡb層出土である。1～7は口唇部に原体圧痕、口縁部から体部にかけてゆるやかに外傾し、斜行縄文を施しており、胎土に多量の繊維と雲母を含む深鉢形土器である。LRの単一原体を、角度を変えながら施文し、羽状縄文のようにになっている。焼成は良好である。原体そのものが大きく、器厚は約1.0cmほどある。なお、1～7は同一個体と思われるが接合できる破片はなかった。8は深鉢体部片で斜行縄文を施す。9のみⅡa層出土であり、網目状撚糸文を施す深鉢体部片である。10～20はⅠa層出土である。10は平坦口縁の深鉢で、体部から口縁部にかけて地文が施される。胎土に繊維を含む。11は木目状撚糸文を施す深鉢体部片である。12・13は網目状撚糸文を施す深鉢体部片である。14は隆沈線文が縦位に施される深鉢体部片である。底部付近である。15は深鉢体部片で、撚糸文を施文したのち、2条の沈線文を描き、沈線間は磨消している。16は深鉢体部片である。斜行縄文(LR)を施し、曲線的な沈線文の間を磨消している。17は斜行縄文(LR)を施す深鉢体部片である。18は地文を縦位に施す深鉢体部片である。破片中央できつく内湾し、内外面に輪積み痕が確認される。19は鉢形土器の口縁部で、口唇部は平坦に調整されている。横位平行沈線文を施し、小波状を呈する。口縁部から頸部にかけて段が設けられる。口縁部内面にも1条の横位沈線文が施文される(大洞A'式)。20は口縁部から頸部にかけて直立する鉢形土器である。3本一組の平行沈線文が施される。器内面にも横位沈線文が1条施文される(砂沢式)。
- 石 器 21は腹面右側縁に刃部を持つ頁岩製の削器である。22は背面右側縁に刃部を持つ頁岩製の削器である。下半分が欠損している。23は両面を調整し、押圧剥離によって二縁辺に刃部を作り出した両面調整石器である。24は安山岩を石材とした敲石である。

(4) 調査のまとめ

調査の結果、縄文時代前期初頭から弥生時代前期初頭にかけての遺物包含層が確認された。遺物包含層において特筆すべきは、胎土に繊維を含んだ土器が出土したことである。この土器は、口唇部に原体圧痕が施され小波状を呈しており、体部～口縁部にかけて緩やかに外傾し、羽状に見える縄文が施されている。この地文は、LRの単一原体のみを使用し、角度を変えながら羽状縄文のように施文している。また、土器の胎土に多量の繊維と雲母を含んでおり、器厚も1cmと厚めである。青森県表館遺跡(三浦・赤平ほか1988)出土の第XⅡ群土器の中に、これらの特徴との類似点を見出すことができる。この表館遺跡第XⅡ群土器の時期は縄文時代前期初頭と位置づけられており、繊維や雲母の混入率に多少の相違はあるものの、今次調査で得られた土器も第XⅡ群土器の時期設定に併行する可能性が考えられる。口縁部付近しか出土していないため、底部や体部下半の様相については推測の域を出ない部分も多いが、上記の土器群で考えると、底部は砲弾型や丸型を呈するであろう。さらに、単一原体を用いて角度を変えて施文する方法は、関東地方において前期初頭に該当する花積下層式の古段階にみられる特徴である*。

これまで西黒石野遺跡において出土した縄文時代前期の土器は、器面にS字状連鎖沈文や網目状撚糸文を施す所謂大木2a～2b式に相当する土器のみであった。これ以前の土器では、第11次調査で出土した縄文時代早期の土器群がある。早期初頭の無文土器や早期中葉の沈線文、縄文・撚糸文、貝殻文を施文する土器が多数出土している。これらは、報告書に



第 19 圖 遺物包含層出土遺物

より西黒石野Ⅰ群土器＝早期初頭，Ⅱ群土器＝早期中葉という区分がされている（盛岡市：2008）。これらを踏まえると，今回の調査で出土した土器は，第11次調査にて出土した西黒石野Ⅰ・Ⅱ群土器の早期初頭から早期中葉より新しく，第13次調査にて出土した大木2a・2b式併行関係よりも古く，縄文時代早期末から前期初頭に該当するものと考えられる。

盛岡市内では，早期末葉や前期初頭の出土例は，ほかの早・前期遺跡に比べて少ない。早期末葉の土器は，大新町遺跡・大館遺跡・猪去館遺跡・大谷地遺跡より出土しているが，いずれも縄文条痕土器群・縄文土器群（赤御堂式併行）のものである。前期初頭の土器では，千鶏Ⅰ式や上川名Ⅱ式，長七谷地第Ⅲ群に併行関係を持つ，羽状縄文系土器群や所謂「びっちり縄文」が多くを占めている。本文では，これまで市内で出土してきた当該期の土器の特徴とは異なる特徴を持つ縄文時代前期初頭の土器として捉えておきたい。

このほかの土器は出土状況を考えると二次堆積であるが，縄文時代前期・中期・後期・晩期・弥生時代前期初頭の幅広い時期の土器が流入していることから，調査区周辺で集落が長きに渡って形成されていたと推察できる。今回の調査では，遺物に伴う遺構を確認することができなかつたため，集落生活との関わりなど明確にし得ない部分が多い。しかしながら，市内では出土例の少ない縄文時代前期初頭の資料を得ることができた。今後の類例の増加を待ち，後考を期すこととしたい。

*：北上市立埋蔵文化財センター 岩田貴之氏のご教示による。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1988 『表館（1）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集
- 熊谷常正 ほか 1989 『東北・北海道における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年について』第4回縄文文化検討会シンポジウム
- 盛岡市教育委員会 2008 『薬師社脇遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書－』
- 神原雄一郎 ほか 2009 『盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化【資料集】』盛岡市遺跡の学び館
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2009 『川目A遺跡第6次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第525集
- 盛岡市教育委員会 2013 『盛岡市内遺跡群－平成22・23年度発掘調査報告－』
- 盛岡地区広域消防組合 盛岡市教育委員会 2014 『新茶屋遺跡－盛岡中央消防署山岸出張所庁舎建設に伴う発掘調査報告－』
- 瀧野常實 盛岡市教育委員会 2018 『小山遺跡－介護福祉施設建設に伴う緊急発掘調査報告書－』

写真図版



西鹿波遺跡第30次調査区全景



R A 042 竪穴建物跡全景



R A 042 竪穴建物跡遺物出土状況



R A 042 竪穴建物跡出土遺物 (1)



R A 042 竪穴建物跡出土遺物 (2)

第2図版



台太郎遺跡第 87・88 次調査区全景



R A 702 竪穴建物跡全景



R E 097 竪穴跡全景



R G 280 溝跡全景



台太郎遺跡第 87・88 次調査出土遺物



西黒石野遺跡第14次調査区全景



遺物包含層断面



遺物出土状況



遺物包含層出土遺物 (1)



遺物包含層出土遺物 (2)

附 章

台太郎遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

台太郎遺跡は、岩手県盛岡市向中野二丁目 137-28 (北緯 39° 40' 54.6"、東経 141° 08' 28.6") に所在する。測定対象試料は、RA702 竪穴建物跡の床面付近で出土した 1 点の炭化材から 2 ヶ所 (年輪は不明瞭だが離れた部位から) 採取し、各々試料とした (表 1)。推定年代は、出土土器や周辺遺跡の事例などから 8 世紀代とされている。

なお、この 1 点の炭化材を対象に樹種同定も実施されている (別稿樹種同定報告参照)。

2 測定の意義

試料が出土した遺構や出土土器の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシユウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下

1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、試料1-1が $1230 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料1-2が $1300 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、試料1-1が713 ~ 863cal ADの間に4つの範囲、試料1-2が666 ~ 764cal ADの間に2つの範囲で示され、いずれも推定年代の8世紀を含む年代である。

なお、今回測定された試料は炭化材であるため、次に記す古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる (古木効果)。今回測定された試料には樹皮が確認されていないことから、この木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。測定結果はおおむね推定に近いので、古木効果の影響は大きくないと見られるが、2試料の間にある年代差にはこの効果が表れていると見られる。

試料の炭素含有率は試料1-1が64%、試料1-2が62%の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表 1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-172698	試料 1-1	RA702 竪穴建物跡 床面付近	炭化材	AaA	-24.94 ± 0.43	$1,230 \pm 20$	85.77 ± 0.25
IAAA-172699	試料 1-2	RA702 竪穴建物跡 床面付近	炭化材	AaA	-24.68 ± 0.41	$1,300 \pm 20$	85.01 ± 0.25

[IAA 登録番号 : #9000]

表 2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-172698	$1,230 \pm 20$	85.78 ± 0.24	$1,232 \pm 23$	713calAD - 744calAD (27.0%) 765calAD - 778calAD (11.2%) 791calAD - 827calAD (17.5%) 840calAD - 863calAD (12.5%)	689calAD - 750calAD (37.1%) 760calAD - 880calAD (58.3%)
IAAA-172699	$1,300 \pm 20$	85.07 ± 0.24	$1,304 \pm 23$	666calAD - 710calAD (48.3%) 746calAD - 764calAD (19.9%)	661calAD - 723calAD (66.3%) 740calAD - 768calAD (29.1%)

[参考値]

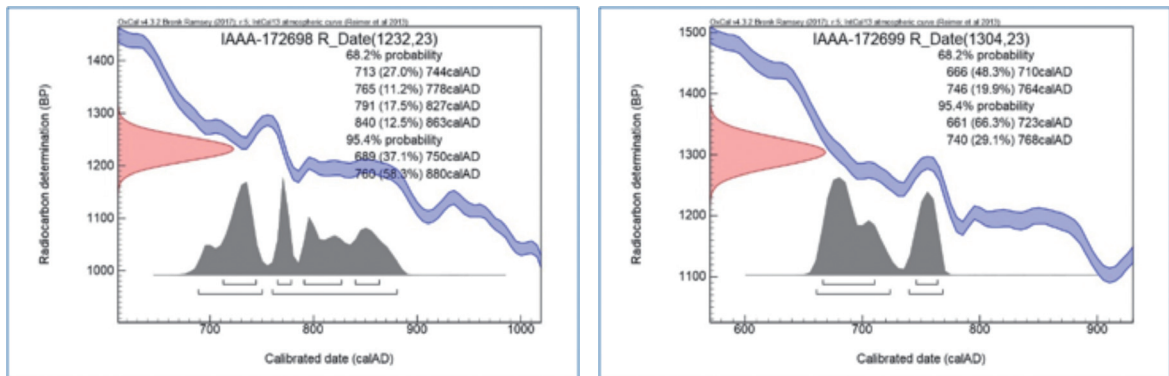


図 1 暦年較正年代グラフ (参考)

台太郎遺跡から出土した炭化材の樹種

1 試料

台太郎遺跡は、岩手県盛岡市向中野二丁目 137-28 に所在する。本遺跡では、RA702 竪穴建物跡の床面付近から炭化材が出土したため、当時の木材利用状況を調査する目的で樹種同定を行った。

なお、この炭化材を対象に放射性炭素年代測定が実施されている。この建物跡は 8 世紀代と推定されており、年代測定の結果もこの推定に整合的である（別稿年代測定報告参照）。

2 分析方法

炭化材は、乾燥後ステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の 3 方向の断面を割り出す。これを粘土でプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づいて同定を行った。

3 結果

同定結果を表 1 に示す。炭化材はバラ科のカマツカに同定された。以下に同定の根拠を示す。

・カマツカ (*Pourthiaea villosa* Decaisne var. *laevis* Stapf)

中程度の管孔がほぼ単独で年輪内に平等に散在する散孔材。晩材部で多少径が減少する。道管は単穿孔で、内壁にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1-4 細胞幅で平伏細胞と方形細胞からなり、平伏細胞のみが連続する場合が多い。放射組織上下縁辺に直立細胞がある。

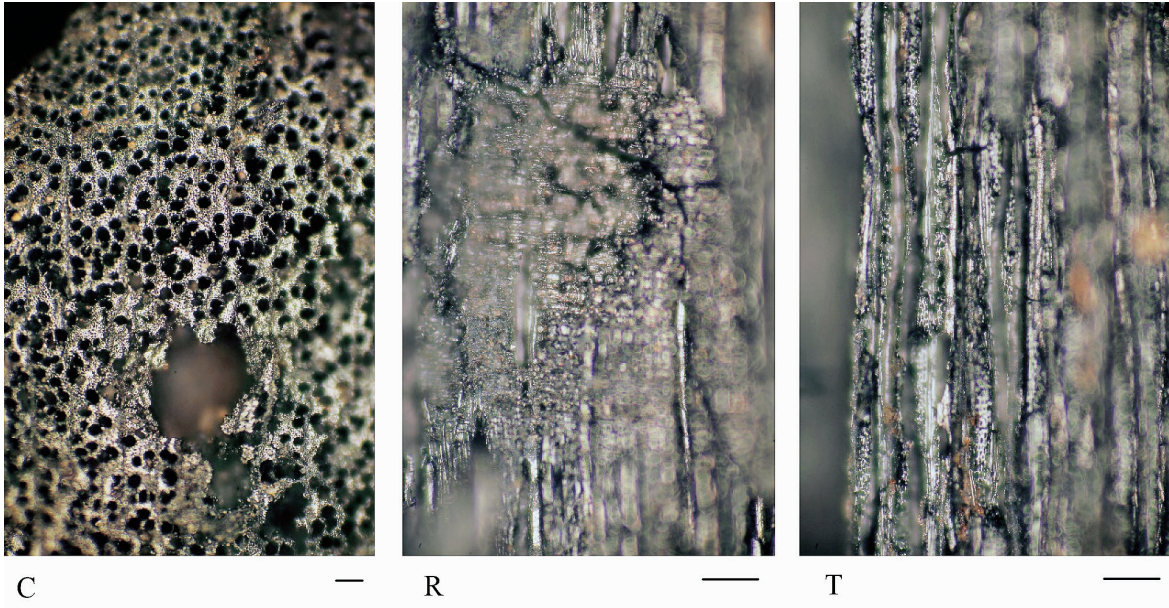
4 考察

カマツカは丘陵や山地に生育する落葉低木である。材質は緻密で強靱だが、あまり太く成長しないことから、工具などの柄や細工物に使われる場合が多い（伊東 1997）。本遺跡の炭化材も、竪穴建物内の道具類が炭化したか、燃料材の可能性はある。

文献

伊東隆夫. 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料 第 33 号別刷. 京都大学木質科学研究所.

※) 本分析は古代の森研究舎の協力を得て行った。



図版1 台太郎遺跡 RA702 竪穴建物跡出土炭化材の顕微鏡写真
C：横断面、R：放射断面、T：接線断面、スケールは0.1mm

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん							
書名	盛岡市内遺跡群							
副書名	平成28年度発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ番号								
編著者名	鈴木俊輝, 今松佑太							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605							
発行機関	盛岡市教育委員会							
発行年月日	2019年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
にし か ど い せき 西鹿渡遺跡	いわて けんもりおかし 岩手県盛岡市 さんぼんやなぎ 三本柳2地割 35-17		LE27-1046	39°	141°	2016.04.27	73	
				39′	09′	～		
				55″	50″	2016.05.24		
だい た ろ う い せき 台太郎遺跡	いわて けんもりおかし 岩手県盛岡市 むかいなかの 向中野二丁目 37-68	03201	LE16-2269	39°	141°	2016.05.16	第87次 61	個人住宅建築
				40′	08′	～	第88次 61	
				56″	26″	2016.06.03		
にし くら い し の い せき 西黒石野遺跡	いわて けんもりおかし 岩手県盛岡市 くろいしの 黒石野二丁目 35-32		KE96-1289	39°	141°	2016.12.15	36	
				44′	08′	～		
				29″	37″	2016.12.16		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西鹿渡遺跡 第30次	集落	奈良時代	竪穴建物跡 1棟		土師器, 紡錘車			
要約	西鹿渡遺跡は北上川西岸の沖積段丘上に立地する古代の集落遺跡で、これまでに古代の竪穴建物跡が約40棟確認されている。本調査では奈良時代の竪穴建物跡が確認され、少なくとも3回カマドの造り替えが行われていたことがわかった。							
台太郎遺跡 第87・88次	集落	奈良時代 古代	竪穴建物跡 1棟 竪穴跡 1基 土坑 1基 溝跡 1条	土師器, 紡錘車, 砥石				
要約	台太郎遺跡は大規模土地区画整理事業によって、遺跡西部から中央部が調査されており、古代の竪穴建物跡が約700棟確認される、北上川流域で最大規模の集落である。本調査では奈良時代の竪穴建物跡や竪穴跡などが確認された。							
西黒石野遺跡 第14次	集落	縄文時代 弥生時代	遺物包含層		縄文土器, 石器 弥生土器			
要約	西黒石野遺跡は、盛岡市内では類例の少ない縄文時代早期から前期の竪穴建物跡が多数確認されている。本調査では、縄文時代前期から弥生時代前期の遺物包含層が確認され、市内では新しい特徴を持つ縄文時代前期初頭の土器が出土した。							

盛岡市内遺跡群

— 平成 28 年度発掘調査報告書 —

2019 年 9 月 30 日 発行

編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館
〒 020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1
TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605

発行 盛岡市教育委員会

印刷 河北印刷株式会社
〒 020-0015 岩手県盛岡市本町通 2 丁目 8-7
TEL 019-623-4256 FAX 019-623-0976

